

人づくり 実践事例集



意味ある人

何かができる人

精神的に自立している人

思いやりのある人



しつけの静岡方式

美しく挨拶しよう

美しく歩こう

美しく話そう

はじめに

静岡県では、平成10年7月に「21世紀を担う人づくり」について検討する「人づくり百年の計委員会」を設け、平成11年10月に「意味ある人をつくるために」と題した提言をいただきました。静岡県ではこれを基本理念として「人づくり」を推進しています。

また、平成17年6月には、人づくりの諸施策を総合的に推進していくため「創知協働 人づくり推進県民会議」を設置し、平成18年3月に「全国モデル 静岡発 “人づくり日本一” さらに前進を ～“意味ある人” づくりのバージョンアップ～」と題した報告書をいただき、その成果を生かした施策を積極的に展開しているところです。平成18年度には、この報告で示された、人づくりの基盤となる“めざす社会”の方向性とその実現に向けた施策を検討する「人づくり“めざす社会”具現化懇談会」が設置され、平成19年3月に「“人づくり日本一”に向けて志を持った人がチャレンジできる環境作り」と題した報告書をいただきました。

静岡県では、「人づくり百年の計委員会」提言にもとづく県の取組や、地域や団体等の実践事例をわかりやすくお伝えすることを目的に、広報紙「人づくり情報 意味ある人」を作成し、静岡県のホームページでも公開しております。

このたび、平成19年度に紹介した県の施策や地域での実践事例を中心に、「人づくり実践事例集 2008年版」を作成いたしました。人づくり推進員や人づくり事業に参画していただける方々に配布し、参考資料として御活用いただくことをねらいとしております。

この冊子が、県民の皆様の人づくりについての興味や関心を高め、“意味ある人”を再認識し、各地域で人づくり実践活動が繰り広げられるための一助となることを願っております。

なお、地域での実践活動の取材に快く御協力いただいた各地域活動団体や学校の関係者の皆様には深く感謝いたします。

また、本冊子に掲載した「人づくりちょっといい話」は、正・続「午前8時のメッセージ99話」（草柳大蔵著 静岡新聞社出版）から引用させていただきました。快く引用をお許しくださった静岡新聞社に深く感謝いたします。

平成20年5月

県民部長
稲津 成孝

目 次

I 人づくり実践事例 ～静岡県の取組～

1 子どもと家庭

- (1) “しつけ”の静岡方式(県民部大学室) 1
- (2) お父さんの子育て手帳(県教育委員会社会教育課) 3
- (3) 子どもの食習慣改善の推進(県教育委員会体育保健課・産業部こめ室) 5

2 子どもと学校

- (1) WAZAチャレンジ教室(産業部職業能力開発室) 7
- (2) 教えて考えさせる授業(県教育委員会生涯学習企画課) 9
- (3) 小中学校の科学技術教育支援事業(県教育委員会高校教育課) 11

3 社会と人間

- (1) ふじのくにゆうゆうクラブ(県教育委員会生涯学習企画課) 13
- (2) 通学合宿(県教育委員会社会教育課) 15
- (3) 地域の青少年声掛け運動(県教育委員会青少年課) 17

II 人づくり実践事例 ～人づくり推進員・地域・各種団体の取組～

1 子どもと家庭

- (1) 美しく挨拶しよう(掛川市立原田小学校児童会・PTA) 19
- (2) 小・中学校における人づくり地域懇談会(人づくり推進員) 21
- (3) 幼稚園における人づくり地域懇談会(三島市・人づくり推進員) 23
- (4) 伊豆人づくり協議会講演会・意見交換会(伊豆人づくり協議会) 25
- (5) 人づくり推進員による啓発イベントの開催(西部地域Cグループ人づくり協議会) 27
- (6) 地域をあげた食育の推進(岡部町・人づくり推進員) 29

2 子どもと学校

- (1) きれいな学校(森町立泉陽中学校) 31
- (2) 学校の職員を中心とした人づくり懇談会(人づくり推進員) 33
- (3) 気持ちのいい子ども(「小さな親切」運動) 35

3 社会と人間

- (1) 地域の青少年声掛け運動(吉田町) 37
- (2) 民生委員・児童委員との懇談会(人づくり推進員) 39

静岡県Iの取組



○「人づくり百年の計委員会」提言では、“美しい”ということを探索しながら、次の3つの柱を立てて“しつけ”の静岡方式を創り出そうと提案しています。

■美しく挨拶しよう

家族での挨拶は、子どもの安心感を生み、家族のきずなを増していきます。まず、大人から子どもへの美しい挨拶で、子どもの自尊心を育てていきましょう。

■美しく歩こう

美しく歩こうは“人間らしい立居振舞”がテーマです。まず大人が模範を示し、家族なりの「作法」を作り上げていきましょう。

■美しく話そう

家庭の中での会話や読み聞かせなどにより、しっかりとした「日本語」を身につけさせ、自分の意見を表現する力をつけていきましょう。

○県では、人づくり推進員が各地域で行っている「人づくり地域懇談会」や、広く県民の皆さんを対象とした「人づくり講演会」などの場で、しつけについて考える機会を設けています。

○できるところから“しつけ”の静岡方式をはじめましょう。まずは大人から！

しつけをテーマとした「人づくり講演会」から

○「うちの子は1日、1時間半しかテレビを見せるのを止めます。それから、帰ってきたときに、脱いだ靴を必ず自分で、出船に揃えてから上がるようにさせます。飼っているペットは必ずその子に世話をさせます。」 　　そういうふうには、一つ一つ家庭の中、空間の中で自分たちが教育という名の中でできることをやっていったら、この重なり(家庭・学校・社会の重なり)はもっとすばらしいものになるでしょう。

○美しくというのは、ここでは“美”という字を書きましたけれども、本当に書きたかったのは“厳”という言葉です。宮島に行くと、^{いづくしま}厳島神社というのがありますが、あれは元はうつくしま神社です。“うつくし”は厳。厳というのはどういうことか。過不足がないということです。過不足がないということは、エネルギーの燃えかすが少ない。エントロピーが小さいということです。すがすがしいということなんです。



故 草柳大蔵氏（人づくり百年の計委員会会長）
静岡県発行「人づくりの道標 草柳大蔵先生のメッセージ」

人づくり百年の計委員会提言「意味ある人をつくるために」から

○“しつけ”というのは、『広辞苑』を見ますと、「“躰”とも書く」とあり、「礼儀作法を身につけさせること。また、身についた礼儀作法」という意味に続いて、「縫い目を正しく整えるために仮にざっと縫いつけておくこと」という意味が出てきます。(中略) 何も“きびしく”しなくても、家族みんなが“美しい”ということを楽しく模索しながら、“しつけ”は社会全体で仕上げていけばよいと気楽に考えて、その“美しい”という方向に“仮にざっとやってみる”ということで、「家族関係」を強めながら、みんなが“しつけ”の静岡方式を創り出そうではありませんか。

人づくりちょっといい話

母の躰—背筋を伸ばして歩け

古い時代の父の躰に続いて、今度はお母さんの躰を紹介しましょう。

お母さんの躰というのも実践的な躰なのですが、これが実にその当時の日本の農村、その中で背筋を立てて生きていくためには何が必要だったかなと感じさせるものなんです。

内容はまず「あんぐりあんぐり歩くものではない」。つまり背筋はシャンと伸ばしてきれいな姿で歩けと言うんですね。そうしないと人に馬鹿にされるぞということです。

二番目は「人並みに暮らせ。どんなにお金が貯まっても無駄をするんじゃない、ぜいたくをするんじゃないよ。それから、他の人がやっていることを見下したりしないで『その人がやっていることは正しいんだ』と思ってやりなさい」と。女の子たちは子どものころ、畑仕事をする時にひっ詰め髪にして後ろで結んだんですね。それで「髪を結ぶ時に紙を使ってはいけない。皆が藁しべで結んでいるのだから最後まで1本の藁で髪を束ねろ」と言うんですよ。

こういう教え方を私は素晴らしいと思うんですよね。「道をあんぐりあんぐり歩くものではない」とか「人並みに暮らせ」とか。

三番目がとても大切なんですが「途中で仕事を投げるな」と言うんですね。「手掛けた仕事は最後までやれ」と。これを繰り返し繰り返し教えるんですよ。いろいろな例を引くんです。例えば、すぐ近所にとっても器用で評判の大工さんがいる。その人が畑仕事をするとあっちを掘ったりこっちを掘ったり、途中で鍬を放り出してあぜ道にしゃがみこんで一服していたりする。それだけのことなのですが、普段は器用な大工さんで「便利な人だ」「ありがたい人だ」と言われるのだが、「あの男はしょうもない」と人格的には信用されないんですね。その話を聞いて聞かせるんです。「人間、器用なだけでは駄目なんだよ。やりだした事をやり遂げるといいう事が人の評価を受けるものなんだよ」というふうに教えるんですね。

これが母の教えなんです。実に単純なんです、それを守っていないと、村の中でつまはじきにされたり、仲間に入れてもらえなかったり、あるいはけがや病気をしたりするんですね。だから人間としての最低限のものをキチッと守らせる。それが躰になっているんですね。

躰というのは、私の記憶では、中国から伝わった漢字ではなく、日本の国字で作った字だと思うのですが、身偏に美しいと書きますね。躰の良い人は実際に気持ち良いですよ。しかし、私たちが見ているのは都会生活です。文明が発達して便利になった世の中ですよ。だけどそうではない時代の中で人間がどう生きていくか、つまり心の立てようですね。このくらい見事に心を立てていたという時代はないと思うんです。そしてその心を立てる二つの柱は、お父さんの躰とお母さんの躰だったんだなとつくづくそう思います。

草柳大蔵著 「午前8時のメッセージ99話」(平成13年発行)より



- 父親の家庭教育への参加を応援することを目的として、不足しているといわれる**父性に基づく家庭教育の在り方**を中心に、父親・母親が取り組みやすい内容を取り上げ、作成したのがこの手帳です。
- キーワードは、親自身の「良心」と親子や夫婦などの家族の「コミュニケーション」です。
- 理解編・実践編・基礎知識編の3編に分かれ、記入欄も設けるなど、内容も充実しています。

「お父さんの子育て手帳」の内容

(1) 子育てはまず子ども理解から

理解編では、父親・母親が今の我が子の姿を見つめ、子どもと向き合う手助けとなるように、子どもの成長の様子を記録する欄を設けました。本手帳は母子健康手帳と共通している部分もあるので、父親・母親がそれぞれの目で見ても、相談しながら記録できるようにしました。



お父さんの子育て手帳

(2) 基本的な生活習慣や我慢するをしつけるなど、父親・母親が取り組みやすい8つの実践

実践編では、次の8つについて「なぜ」それが必要か、「どのように」実践したらいいのかを見開き・イラスト入りでわかりやすく事例を掲載しました。

- | | |
|-------------------|----------------------|
| ①親の生き方を示す。 | ⑤我慢するをしつける。 |
| ②夫婦で話し合い、支え協力し合う。 | ⑥家庭や地域社会でのお手伝いをしつける。 |
| ③子どもと遊び、自立を促す。 | ⑦社会の礼儀やルールをしつける。 |
| ④基本的な生活習慣をしつける。 | ⑧善悪のけじめをしつける。 |

(3) さらに学びを深めるための基礎知識編

父性機能と母性機能のバランスの重要性や、家庭教育の目的と親の役割、静岡県の意味ある人づくり、また脳から見た人間の発達などを科学的に説明してあります。

(4) 相談機関を関連内容で提示

実践事例に関連のある相談機関を掲載してあります。

「お父さんの子育て手帳」に関する情報は、県教育委員会社会教育課のホームページでご覧いただけます。
<http://www.pref.shizuoka.jp/kyouiku/kk-08/>

人づくりちょっといい話

夏休みの父の背中

夏休みというと、思い出すのは海の中の父親の背中です。父は真鶴の出身で、泳ぎが非常にうまかった。ところがその泳ぎたるや、かんかい流といって小田原藩の侍が泳いだ泳ぎ方なんですね。私がかんかい流で泳ぐんで友人たちは笑うんです。しかし「武士の泳ぎ方を教えてやる」と言うと、シーンとして私の泳ぎを見てるんです。楽しい夏休みでした。

夏休みに入ったところで、お父さんお母さんにお願ひがあります。お子さんと接する機会が非常に深く広がってくると思うので、その時間を大切にしていきたいんです。

父や母を描いた本で私が最近読んだ本に、日本経済新聞の元記者で論説委員をやっておられた石田修大さんが、父親の石田波郷さんのことを書いた『わが父波郷』があります。無駄のない文章で、淡々と出来事だけを綴った中で、結核に悩みながら素晴らしい句を作った一人の俳人の姿を見事に書き描いています。父親と著者との間にはあまり交流がないのですが、それだけに父親の眼差しや言葉、時には咳払いさえ覚えているのです。お父さんやお母さんが何気無く言ったことが、子どもには大きなメッセージとして心の中に突き刺さって、それが傷であったり潤いであったり、子どもの一生を決定する材料であることには間違いないですね。

川上哲治さんは年配の方でないにご存じないでしょうか。読売巨人軍で監督をされ、いわゆるV9を遂げた人です。現役時代は、入団してから引退するまでジャイアンツの選手で、一塁を守り、背番号は16、毎年リーディングヒッター。熊本県出身の素晴らしい男で、寡黙で、座禅を組んだり石を磨いたり、もっぱら自己形成に努めた人です。

川上さんも父親のことをエッセーに書いています。熊本にも浜松と同じように凧揚げ大会があるそうです。哲治さんが少年から青年になりかけの時に、広場で凧を揚げていると糸がほつれてしまいます。気が付くと後ろに父親がいて「かしてごらん」と言って、一生懸命に糸をほどこうとする。お父さんは長いこと、複雑に絡んだ糸と格闘しています。哲治さんがたまらず「お父さん、もういいよ。帰ろうよ。凧糸は家にたくさんあるし。それはそれで切って、真っすぐな所だけつなげばいいじゃないか」と言うと、父親が振り返って「いったん取り掛かった仕事は、なし遂げなければ男じゃないんだよ。よく覚えておけよ」とだけ言うんです。黙々と小一時間かかって糸を真っすぐにし、凧はもう一度揚がったそうです。

川上さんは「私は青い空を見ると、いつでもまず凧を思い出す。それから父親の『男はいったん取り掛かった仕事を最後までやり遂げなければ男とは言えないんだよ』という言葉は今でも思い出す」と書いていらっしゃる。その後、川上さんは戦争に参加され、戦野をさまよい歩くのですが、お父さんの言葉は忘れなかった。「空」と「凧」と「父」という三つの風景が、川上さんの人格形成にとって大変な材料になっているんだなあと思います。

草柳大蔵著 「午前8時のメッセージ99話」(平成13年発行)より



- 家庭・家族の形態が多様化し、朝食の欠食、偏った栄養摂取など、子どもの心身の健康のもとになる食習慣の乱れが目立っています。朝食は一日の活力の源であり、朝食をとることにより心が落ちつき、仕事や勉強に集中することができます。
- 県では、「家庭での人づくり」として、子どもの食習慣の改善を進めています。特に、子どもが朝食を毎日きちんととること、栄養バランスのよい食事をとることを目指しています。具体的な取組として、「朝食クイックメニューコンクール」と、書き込み式食育啓発リーフレット「朝ごはん食べていますか？」を紹介します。

朝食クイックメニューコンクール

このコンクールは、成長過程にある子どもが望ましい食習慣を身につけることができるよう、朝食摂取率 100%を目標として実施している事業です。

また、子どもたちが、地元産の食材からふるさとの素晴らしさを実感できることも期待しています。県教育委員会と県産業部こめ室との共催により、このコンクールを実施しており、平成 19 年度は、過去最高（平成 14 年度以降）の 2,168 点もの応募がありました。

教育長賞	極上！ねぎしらすバーガー 浜松市立豊西小学校 6年 清水 樹さん
優秀賞	ライスピッツア 袋井市立浅羽中学校 3年 杉浦麻梨奈さん しらすと山芋の和風ふわふわドリア 県立磐田農業高等学校 1年 井口 葉子さん



ふるさと大好き
朝食クイックメニュー集

書き込み式食育啓発リーフレット「朝ごはん食べていますか？」

このリーフレットは、子どもたちの食習慣の改善を図るため、子どもたちの 1 週間の朝食摂取状況を振り返ることができるチェックカード形式のものです。中学校入学後の時期に、朝食欠食率の上昇が顕著になる傾向が続いているため、平成 19 年度は県内の公立中学校 1 年生全員が活用することにしました。調査した期間は、平成 19 年 6 月下旬から 7 月中旬（第 1 期）と 9 月中旬から 10 月上旬（第 2 期）の「授業のある日 5 日間」です。

リーフレットを活用することで、生徒、担任、保護者が一定期間継続して朝食に意識を持つことができるようになり、この期間の朝食摂取率は、第 1 期、第 2 期ともに、高水準（95%以上）でした。また、週 3 日以上 3 色の食品がそろった朝食を摂っている生徒の割合は第 2 期の調査では、66.4%でした。第 1 期の調査に比べ 4.5%改善しており、栄養バランスのとれた望ましい朝食のあり方について、学校及び家庭による指導の成果が表れてきていると思われます。



書き込み式食育啓発リーフレット「朝ごはん食べていますか？」

「朝食クイックメニューコンクール」に入賞した献立は、県教育委員会体育保健課のホームページでご覧いただけます。<http://www.pref.shizuoka.jp/kyouiku/kk-11/>

人づくりちょっといい話

何よりも大切な朝ご飯

時々、心ない若者から「長生きして何かいいことがありますか？」と聞かれることがあるんですよ。いいことがあるんです。七十年も生きていますと、大切な話は何回も聞いていることに気付きます。「大切な事柄は時間を超越しているんだ」ということが分かるんですね。

例えば、「お母さんが朝ご飯を子どもにきちんと食べさせることは、子どもの教育の半分以上に大切なものだ」という話があります。私はこの話を、三十年前に、神戸にある灘高等学校の校長先生から聞きました。灘高といえば、当時、二百人余りの三年生の約半数が東大にストレートで入っていた有数の進学校です。その校長先生に、「生徒さんが浪人もせずにスラスラと、しかもひねくれた子どもも出ないで東大に合格しますね。秘訣は何ですか」と聞いたら、「一つは『精力善用』。体が持っているエネルギーを無駄遣いしないようにするということ。もう一つは、朝、学校へ来る前に、お母さんの作った朝ご飯をきちんと食べて来ること。この二つですよ」と言われたんですよ。「簡単なことですね」と言ったら、「簡単なことがなかなかできないのが現代ではありませんか、草柳さん」と言われてしまった。

十数年ほど経って、山形県の小国町で、キリスト教信者で人格者のご夫婦が、^{キリスト}基督教独立学園高等学校という全寮制の高校を主宰していらっしゃるのを取材しました。「先生、この学校で一番大切なことは何ですか？」と聞いたら、「朝、家内が作る朝ご飯です。おいしいご飯を作ってあげれば、生徒たちが残さず全部食べる。そこから生徒たちの学習のエネルギーが出るんですよ」と言われたんですね。「やっぱり、母親、あるいは朝ご飯を作ってくれる人が、心を込めたご飯を作ってくれることが教育の中心なんだな」と思ったんです。

それから二、三年後、お医者さんを相手にした連載を六年間やったことがあります。月刊誌でしたから、六年間で七十二人のお医者さんに会いました。その中の三人が同じことをおっしゃいました。「朝ご飯をきちんと食べる」と。三十分すると消化して、体温が上がり血流が良くなる。大脳に血液が全部集まって、ちょうど家で朝ご飯を食べて学校に行くと、第一時限の時間が始まるのが三、四十分後。集中して授業を聞けるのが午前中なんですね。胃袋は体の中で一番遅く目が覚めるそうです。大脳が目覚めてから三十分必要です。ですから、三十分前に起きて、顔を洗い、部屋を整頓して、庭を掃いてといったことを済ませると大体ご飯時になる。ご飯を食べて学校へ行くと、大脳に血液が集まる最高の状態で教室に座れるから、先生のおっしゃることが全部受け取れるということなんですね。

草柳大蔵著 「午前8時のメッセージ99話」(平成13年発行)より



- 「WAZA チャレンジ教室」とは、県内の技能士資格を持つ職人が小・中・特別支援学校で出前授業を行うもので、県が（社）静岡県技能士会連合会の協力を得て実施している事業です。子どもたちがものづくりのすばらしさや楽しさを体験することを目的としています。
- 平成19年度は、小・中・特別支援学校合わせて32校1,918人の児童・生徒がアートモザイク（タイル細工）、銅板へら出し、指輪、紋様こて砂絵、ミニ屏風、万華鏡などの製作物に挑戦しました。

沼津市立第五中学校の取組 ～無から有を作るのが職人の仕事～

平成19年6月29日（金曜日）、沼津市立第五中学校において、「WAZA チャレンジ教室」が開かれました。2年生の生徒163人が、銅板へら出しや石彫刻など10の教室に分かれて、技能士の指導を受けながら作業に取り組みました。

紋様こて砂絵の教室では、沼津市や近隣市町在住の6人の左官技能士の指導のもと、ベニヤ板に型紙を貼り付け、10色あまりの原色の砂壁材をこてで塗り付け、型紙を剥がすという手順で、錦鯉が泳ぐ姿やつがいの鶴などの絵を作りました。生徒たちは、はじめはぎこちない手つきで作業を始めましたが、慣れてくるにつれ、「砂壁材を塗りつける時の感触が良くて面白い。」「こての使い方のコツを教えてください、うまくできるようになってきた。」などの声が聞かれ、作業を楽しむ様子が見え始めました。鯉の目をどう入れたらよいか悩んでいた子は、近くで講師が見本を作り始めると、職人の手つきをすこしでも真似しようとじっと見ていました。型紙をはがしてできあがった作品を見て、皆が満足した表情になるのが印象的でした。

授業の始めに行われた講師の自己紹介の中で、ある左官技能士が、「無から有をつくるのが職人の仕事です。大変な仕事ではあるけれど、やりがいも大きいんですよ。」とあいさつしました。この言葉を胸に抱いて街を歩けば、街のあちこちから職人が作ったものが目に飛び込んでくるのではないのでしょうか。

私たちの住む社会は「何かができる人」によって支えられているのです。



紋様こて砂絵の授業。説明を聞きながら、こてで砂壁材を塗っていく生徒。



銅板へら出しの授業。下絵をボールペンでなぞり、そのまわりを竹へらでおして立体感を出す。



石彫刻の授業。新島で産出される「こしが石」を職人と共に鑿(のみ)で彫っていく。

「WAZA チャレンジ教室」については、職業能力開発室のホームページをご覧ください。

<http://www.pref.shizuoka.jp/sangyou/sa-230/wazachare/index.html>

人づくりちょっといい話

千年持つ釘に込められた祈り

先日、面白い人に会いました。白鷹^{しらたかゆきのり}幸伯^{かじ}という鍛冶屋^{かじ}さんです。一九三五年、愛媛県松山市に生まれました。父親が鍛冶屋をやっていたのですが、一種の見習いでしょうか、日本橋の「木屋」という刃物専門店の店員になります。

著名な宮大工^{にしおかづねかず}の西岡常一^{にしおかづねかず}さんが「木屋」に用事でやってきました。「その手は刃物を扱ってきた手だ」と即座に見抜かれて、「これから薬師寺の西塔を再建するが、東塔のように千年もたせたい。肝心なのは、木と木を留める釘だ。普通の釘は五十年しかもたないから、千年もつ釘を作ってくれないか」と言われます。白鷹さんは喜ぶのですが、そんな釘なんて見たことがない。調べてみると、千年もつ塔に打ってある釘の起源はローマ帝国だった。その釘がシルクロードを伝わって西安に来て、西安から韓国を通過して日本に来ている。それを突き止めて、ローマ帝国の釘がローマ時代にどんな形だったか、イランではどうなったかということすべて調べた。白鷹さんは三十七歳で「木屋」を辞め、釘に取り組みます。

千年もつための一番のポイントは錆びない釘、つまり酸化しない釘です。そのためには原料の鉄の中に入っているイオウとリンを、どうやって燃焼させるかということに行き着きます。それを教わり、何回も実験をするんです。一回、鉄を真っ白に光る手前の千度の温度で焼いて取り出し、パーッと純酸素をぶつけます。そしてイオウとリンを燃やして、温度が下がったものをまたもう一回釜の中に入れて仕上げるといいますよ。白鷹さんはついに二十年間で二万本の釘を作り上げました。

私は実際にこの釘を見せていただきました。素晴らしかった。白鷹さんは千年経っても錆びない釘のためにすべてを注ぎ込んだということになります。平たい言葉で言えば「世のため、人のため」でしょうか。あるいは、千年は美しい塔がもつという美に対する祈りでしょうか。そういう祈りと自分の心とが同心円を組んだ人生というのは、そのことしかしていなくても、非常に密度の高い重い人生なのではないでしょうか。例えば、それがたった一人のおばあちゃんの介護であっても、おばあちゃんと心が通じ、介護と日常の中の自分の心とが同心円を結ぶことができれば、非常に幸せなのではないかなと思います。(後略)

西岡常一(1908~95)=宮大工。飛鳥時代の古代工法で大伽藍を造営できる「最後の宮大工棟梁」といわれた。

草柳大蔵著 「続・午前8時のメッセージ 99話」(平成14年発行)より



- 「創知協働 人づくり推進県民会議『確かな学力』育成部会」の提言（平成 18 年 3 月）に基づき、県教育委員会は平成 18 年度から「確かな学力育成支援事業」を進めています。4つの事業協力校が「教えて考えさせる授業」を研究し、どの子にも「確かな学力」を身につけさせるための授業づくりに取り組んでいます。
- 県教育委員会は「教えて考えさせる授業」を「どの子どもも問いを共有し追究できるように、動機づけの工夫をしたり、ていねいな説明をしたりすることで、問題解決や話し合いに参加させ、子どもが目標とする学力を身につけ、活用できるようになる授業。その際、理解状態を確認する手だてを講じ、学力の定着を図る指導の工夫をする授業。」と説明しています。

磐田市立富士見小学校での公開授業研究会

平成 19 年 5 月 31 日（木曜日）、事業協力校の磐田市立富士見小学校にて公開授業研究会が行われました。この日は「創知協働 人づくり推進県民会議」の「確かな学力」育成部会長を務めた市川伸一教授（東京大学大学院）が指導・助言を行いました。公開授業では、市川教授と竹之内教諭の 2 人が 4 年生の算数の授業（「2 けた÷1 けた」の割り算）を行いました。授業の概略は以下のとおりです。

①新しい学習事項についての教師の説明

既習の易しい問題から今日の学習課題まで段階的に 5 つの例題（ $6 \div 3$ 、 $60 \div 3$ 、 $69 \div 3$ 、 $72 \div 3$ 、 $74 \div 3$ ）を出し、説明する。お金の模型を用いて説明した後、筆算を用いて式を解く。

②理解できたか確認するための課題

教科書の例題を解く。わからないところには付せんを貼る。子ども同士、自分の言葉で割り算の仕方を説明し合うことで、自分の理解度を確認する。疑問点の解決にもつながる。

③理解を深めるための課題

筆算の計算過程で子どもが陥りやすい間違いの書かれたワークシートを渡し、どこが間違っているか自分で考えた後、グループで意見を出し合う。互いに説明し合う。

④各自で今日の授業を振り返り、わかったこと、わからなかったことをまとめる。

授業後の研究協議では、富士見小学校の教職員から「子どもが自分の言葉で説明しようと努力する姿が見られるようになった。」「子どもの説明を聞くことで子どもの考えの過程を把握できるようになり、次の指導に生かせるようになった。」などの意見が出されました。「教えて考えさせる授業」に取り組むことで、これまで行ってきた授業の良さや課題を見つめ直す良い機会になっているようです。

自分で考え、自分の言葉で説明することは「確かな学力」の要素であり、「意味ある人」の 3 条件のひとつである「精神的に自立している人」につながるものです。学校や教育委員会は「確かな学力」の育成に向けて授業改善に熱心に取り組んでいます。



市川教授（右端）が、お金の模型を用いながら「教える」場面



「理解できたか確認する」場面
割り算の仕方について説明する



授業後の研究協議で授業のねらいについて説明する市川教授

「確かな学力育成支援事業」については、県教育委員会のホームページをご覧ください。

<http://www.pref.shizuoka.jp/kyouiku/kk-02/>

人づくりちょっといい話

自己モニターの大切さ

一九八〇年代、つまり今から二十年前にメガヒットし、百万枚以上売れたレコードが何局あったかという十二曲なんです。さて、二十年後の今日、メガヒットは何曲かという三十曲なんですよ。すごいですね。どうしてこんなにみんなCDを聴くようになったんでしょう。こういった精神的な偏りが、今の日本人に強く現れているのではないかというんです。その特徴は、周囲が気になって仕方がない。「周りの人は、自分をどう思っているんだろう？」と。そして周囲のことが気になるから、人となるべく争わないで、人が言うことに同調する。それが昂じていくと、テレビや本に出てくる話というものを安直に信じてしまうんですね。

精神分析というものを始めたのはフロイトという学者です。この人は偉いですよね。だってフロイトという人がいて初めて精神分析ができたんですから、初めてやった人を私は偉い人だと思うんです。このフロイトの時代は、「罪の人」の文化だったんです。「罪の人」の文化というのは、自分の中の葛藤、罪悪感、つまり神との対話とか、若かったときの自分と今の自分との格差、その部分に悩んだんですね。しかし、現在の人とはそうではなくて、「悲劇の人」になったんですよ。「悲劇の人」というのはどういうことかという、周りの人が自分の思い通りにならない。自分はこんなに努力して、自分はこんなに良い仕事をして、自分はこんなに優しいのに、自分はこんなに温かいのに、どうして認めてくれないんだろう、というような不満を持っている。それで、「自分は良いものを持っているのに誰にも評価されない人間だ」といって、自分自身で落ち込んでいくというんですね。だから、周囲の人に気兼ねして、最後は神様をつくってそれにすがったり、逆に自分自身で絶え間なく落ち込んでいく。両方とも間違いなんですね。

それを解消するためには、結局、外の人たちと付き合ってみて、そしてその中で自分自身を評価してみる。つまり「自己モニター」という癖をつければいいわけですね。そこから先は自分で考えていく。例えば、本を読んでも新聞を読んでもいいんです。そこで、自分自身が考えたことを、「間違えているかなあ。そんなことを発表したら人に笑われるかなあ。」とっていないで、ごく近くにいる人、あるいは気軽に話せる人に、「ねえねえ、今朝の新聞にこういうことが出ていて、私はこう思ったんだけど、あなたはどう思う？」と聞いて、「それでいいんじゃないの？」と言われる。それが、自己認知になるわけですね。自分自身を知るという方法。そうやって、自分自身をいろいろなものにモニタリングしていったら、「ああ、これでよかったんだ」というふうに、自分自身で記録をつけていくと、偏った自分から逃れることができるということなんです。

草柳大蔵著「続・午前8時のメッセージ99話」(平成14年発行)より



- 「創知協働 人づくり推進県民会議」の提言(平成18年3月)では、社会全体の発展に寄与する人材育成のために、**児童生徒の科学技術リテラシー(注)の向上や創造的な研究者、技術者の育成**が重要であると述べています。これに基づき、県教育委員会は平成18年度から「科学技術教育研究開発推進事業」を進めています。

(注) 科学技術リテラシー＝科学技術を理解する力・素養

- 高校の生徒や教員が小中学校の児童生徒を対象に**実験や実習を行う「小中学校の科学技術教育支援事業」**はその一つであり、県下9高校(清水東高・藤枝東高・磐田南高・田方農高・静岡農高・磐田農高・沼津工高・静岡工高・浜松工高)が取り組んでいます。

県立磐田南高等学校の取組 ～県内屈指の屈折望遠鏡を用いての太陽の観測～

磐田南高は、文部科学省からスーパーサイエンスハイスクール(SSH)の指定を受け、大学と連携した授業を行うなど高度な理数教育を行う一方、磐田市立磐田西小学校の理科教育支援を行っています。高校の教員が小学生に授業を行う、高校の教員が小学校教員の校内研修の講師を務める、理数科の生徒が小学生の夏休みの自由研究のアイデア集を作成して小学校に提供する等が主な内容です。

平成19年10月15日(月)には、磐田西小の4年生60人が高校を訪れ、太陽の観測を行いました。担当の青島先生が簡単に太陽に関する説明をした後、屋上の天体観測室に児童を案内し、屈折望遠鏡やコロナフィルター付き望遠鏡で太陽を観察しました。投影板上に写る太陽の姿を見て、子どもたちは「太陽の周りがゆらゆらしているのがわかる」「プロミネンスが見えた」と声を弾ませていました。また、太陽を自動的に追跡していた屈折望遠鏡のスイッチを切ると、止まった投影板の上を太陽がゆっくり動いていく姿がよくわかり、「太陽が動いてる!」と一斉に驚きの声を上げていました。観察後、子どもたちから10をこえる質問が矢継ぎ早に出され、全ての質問に先生は丁寧に答えていました。この日の観察が子どもたちの天体への興味関心をかきたてたと同時に、先生の深い専門的知識が子どもたちのさらなる興味を引き出している様子が伺えました。

県内屈指の観測設備を備えた高校で、写真ではなく「本物」の太陽の姿に触れた今回の授業は、小学生にとって、知的興奮を味わうひとときになりました。



上) 地球と太陽の大きさを具体物を用いて比較する青島先生

右) 県内の高校では珍しい大型屈折望遠鏡に見入る磐田西小の子どもたち



ひとりひとり、投影板上に写る太陽の姿を観察しました。

「創知協働 人づくり推進県民会議」科学技術者育成部会のとりまとめは、県教育委員会高校教育課のホームページでご覧いただけます。 <http://www.pref.shizuoka.jp/kyouiku/kk-05/>

人づくりちょっといい話

タイと小林虎三郎

「タイの東北部へ行ってみませんか」 十二年前、今は日本民際交流センターの代表をされている秋尾晃正さんという方が、留学生の言葉に動かされてタイを訪ねました。

驚いたのはその貧しさでした。ほとんど中学に行けず、子どもは小学校を終えたらすぐに労働者として働かなければいけない。秋尾さんは一生懸命に募金運動をして、四十二人の人から五百万円の奨学資金を作り、再びタイの北東部の村に入っていきます。

「奨学金を持ってきたから、進学したい人を集めてくれ」と村長さんに頼みます。集まった子どもたちに「中学に行かないか?」と呼び掛けても、うつむいてだれも返事をしない。三つ四つと村を回ってもその繰り返し。クタクタになって翌日、ハッと気付きます。子どもたちに学ぶことの意味や、自分自身の成長を話していなかったと。

そこで、新しい村に入って子どもたちにこんな話をします。

「日本で明治維新という革命があった時、長岡藩ではお米に困って食うや食わずだった。その時親戚の藩からお米が百俵送られてきた。喜んでみんなで食べようという時に、ただ一人小林虎三郎という学者が『お米は食べてしまえば三日でなくなる。しかしお米をお金に換えて学校を作れば百年二百年と続く人材がそこから生まれてくる』と言った。『何を言うか』と刺客に襲われるのですが、刺客に向かって『斬るなら斬ってくれ。しかし私の言い分を聞いてから刀を抜いてくれ』と、さきほどの話をします。すると刺客は『その通りでした』と引き上げます。結局、そのお米を売ってひもじさに耐えながら学校を建て、その中から山本五十六元帥や斉藤博アメリカ大使といった輝かしい人材が生まれたのです。」

そして秋尾さんは自分の話に戻って、「終戦のとき、日本中が焼け野原でみんな食うや食わずだった。焼け跡に子どもたちがそれぞれ自分で場所を選んで座って、先生から算数や国語や図工を習ったんだ。『青空教室』と日本中で言っていたんだよ。そこから立ち上がった人々がいて、今の日本があるんだ。勉強するということは、君たち自身のためではあるけれども、お父さんやお母さんがもっとマシな生活ができるようになるってことだ。弟も妹も中学校に入れるようになるってことだよ」と説くんですね。

終わって「だから私は中学に入ることを勧めに来たんだ。やるか?」と聞いたら、一番前の小さな子がパッとこぶしを挙げて「入ります!」って言ったそうです。「僕も」「私も」と言い出し、結局全員が中学に行くことになった。それから毎年、秋尾さんは日本に帰ってお金を集めてはタイへ行って、村から村へ学校を建て子どもに教科書を与え先生にお給料を与えていった。現在は中卒が八十六%、一万二千五百人が中学を卒業しています。平成九年からは対象をラオスにも広げ、一万六千人以上の子どもたちの夢をかなえています。

草柳大蔵著 「午前8時のメッセージ99話」(平成13年発行)より



- 県生涯学習振興財団は、学校休業日を中心に、学校や公共施設、山や川などの野外を会場として「ふじのくにゆうゆうクラブ」を開設しています。体験や地域の人とのふれあいを通して子どもたちの豊かな感性と創造力をはぐくむこの講座は平成8年度に始まりました。平成19年度には68の講座で2,105人が受講しています。
- 平成19年度からは「ゆうゆうポイントラリー」が始まり、講座に参加すると単位(ポイント)を獲得し、一定のポイントを集めると認定証をもらえるようになりました。
- 「人づくり百年の計委員会」提言の柱のひとつに「自分を磨く」があります。自分の学びの履歴は自分を磨いた履歴でもあります。

夢見るマンガ家 イラストレーター集まれ!(菊川市)

平成19年6月23日(土)、菊川市の青葉コミュニティセンターにおいて、「夢見るマンガ家 イラストレーター集まれ!」が開催されました。この講座は7年間続いている人気講座です。漫画やアニメが好きな44人の小・中学生が集まりました。中には100km近く離れた富士宮市から参加した小学生もいます。講師は今年4月に二科(にか)展で最高賞にあたる県二科賞を受賞した落合江美さんです。

第1回の今回は、講師と受講生が自己紹介をしたあと、自分のプロフィールをイラストで描きました。自分の姿や、好きな漫画やアニメのキャラクターなど、受講生は夢中になって描いていました。下書きの最中に落合先生が全員にペンとインクのセットをプレゼントすると、子どもたちからは歓声が上がリ、マンガ家に一步近づいたかのような喜びが伝わってきました。

講座には、過去にこの講座を受講し、漫画家の道を歩んでいるOBもボランティアで参加しました。また、初対面の子ども同士が打ち解けて、アドバイスしあう姿も見られました。落合さんは、はじめのあいさつで「みんなで学ぶ場にしよう」と呼び掛けましたが、そうした参加者の様子からも、「絵が上手くなる」ことだけをめざすのではないという、この講座の雰囲気を感じました。

「何かができる」ことが人と人とのつながりを深め、自分に自信をつけていくのです。



受講者を前にあいさつする、講師の落合先生



イラストの描き方を指導する落合先生



初対面で緊張していた受講生もしばらくするとこの通り

「ふじのくにゆうゆうクラブ」については、県生涯学習振興財団のホームページをご覧ください。

<http://www.fijiyuyu.net>

人づくりちょっといい話

中江藤樹の師としての偉さ

中江藤樹なかがとうじゆという人はすごいですね。自分の塾にやってきた子どもでたった一人、教えるそばから忘れていく子がいるんです。その子どもは「先生、ごめんなさい」と授業中に泣くんです。そうすると「泣くんじゃないよ。おまえができるまで先生は付き合うよ」と言って、他の子はみんな帰ってしまったのに、奥さんにご飯を作ってもらってその子にも食べさせて、「わかったか？」と言って教えてやるけれども、どうしても駄目なんです。

ところが、三ヶ月経って、その子が生物に異常な興味を持っていることに気付くんです。そこで、鳥の生態とか虫の生態とか、そういうことを細かく観察して話す。「おまえ、生物が好きなんだな。」というところから、人間の解剖図まで見せてあげる。そして中江藤樹は、たった一人で、その子のために毎晩睡眠時間を減らして、一冊の教科書を書き上げたんですよ。なんと医学の教科書なんです。それで、「さあおまえ、これだったら喜んで勉強できるだろう？」と言って渡す。その子はのちに立派なお医者さんになったんですね。

こういうことを考えてみると、「この子は元々頭が悪いんだ」とか「勉強嫌いなんだ」と親や先生が決めてしまうというのは非常に大きな責任放棄ですよ。何に対する責任放棄かということ、人間が内側に持っている可能性に対する大きな責任放棄なんですよ。その可能性に対して、いろいろな手段で問い掛けて、その内側にある可能性が目覚めさせてくれるまで付き合ってきたというのが、実は終戦前までの日本の教育だったんです。江戸時代の寺子屋が小学校につながったから日本はものすごく教育程度の高い国民国家を形成することができたんですね。その財産を、戦後どうやら食いつぶしちゃったんです。子どもたちの持っている可能性をじっくり育てようというのきな考え方を持てばいいのに、大量生産、大量消費、大量廃棄という、大量というものを軸とした価値観が出てきて、「さあ、大量生産時代に勝つためには、何といっても効率だ」と、人間形成までスピード本位に考えるようになってしまったんですね。それが今日になって、「ああ、大変なことをやってしまったな」という反省が出てきたんだと思うのですが、人間の持っている知恵を何とかして揺り動かして目覚めさせるという、人間的な授業なり、メッセージの渡し方なりがこれから出てくると思うんですね。

そういうことに気が付いた先生が随分といらっしゃいます。「『学力』と言うから、落ちるの落ちないのということになるんだ。そうではなくて、『学習力』というものを考えていけばいいじゃないか」と。案外、地方の学校の先生がちゃんとしたことをおっしゃっているんですよ。私は、「新しい教育の芽、あるいは光というものは、地方から出て行くんだな」という思いで、今、春を迎えようとしています。

草柳大蔵著「続・午前8時のメッセージ99話」(平成14年発行)より



- 「創知協働 人づくり推進県民会議 少子化部会」では、「ふれあいと交流により、自分や他者を尊重し、自信と責任を持った子どもの育成」が重視され、その方策の一つとして、部会から「通学合宿」の実施が提言されました。
- これを受け、県教育委員会では平成 17 年度に 16 箇所で開催した「通学合宿」を拡大し、18 年度には 108 箇所、19 年度は 116 箇所で開催しました。
- 「通学合宿」は、地域の宿泊可能な施設を拠点に、年齢の異なる子どもたちが共同生活をしながら登下校するものです。子どもの生活体験の拡大、責任感・協調性・規範意識・忍耐力などの育成ならびに地域の教育力の向上（地域の子どもは地域で育てる）を目的とし、自治会、老人会、PTA など地域の協力を得て実施しています。

原っ子チャレンジ学校(牧之原市菊川市学校組合立牧之原小学校区)の取組

牧之原小学校では、「感謝・協力・思いやり」をスローガンとし、平成 19 年 6 月 25 日（月）から 6 泊 7 日の長期通学合宿を行いました。3 年生から 6 年生までの 33 人が、牧之原農村婦人の家（菊川市）を宿泊所として一緒に暮らしました。

取材した 28 日は、放課後陸上練習等があり、高学年の児童は午後 5 時頃宿舎に到着しましたが、疲れも見せずすぐに宿題に取りかかりました。30 分後には入浴です。バスに乗って近くの日帰り温泉施設「子生まれ温泉」で湯につかりました。宿舎に戻り夕食をとり、その後は大部屋でトランプをしたり、食堂で保護者や地域の方と話をしたりしてリラックスした時間を過ごしました。

この間、自治会長などの教育後援会の方、児童の祖父母で構成する祖父母の会、PTA、学校の先生方などが入れ替わり様子を見ています。4 日目という事もあり、大人に指示されなくてもバス乗降時の整列や食事の準備・片づけは進んでできていました。入浴時も湯船ではしゃぐことはなく、中には一般客の方と話をする子もいました。実行委員の方々は細かい指示はほとんど出さず、その代わり宿題の面倒を見たり、一緒に将棋やオセロをやったり、雑談したりと、宿舎のあちらこちらで子どもと関わっていました。

異年齢の多くの人と関わる中で子どもたちが社会的マナーや協調性を着実に身につけてきていることを実感しました。話をうかがった実行委員の方々は「準備や運営は大変で、学校や保護者だけでは通学合宿はできない」と口をそろえていました。子どもの成長には地域の大人の関わりが欠かせないということです。人づくりに何が求められるか、通学合宿は雄弁に物語っています。



班ごとに旗を持って下校。約 2 km 歩いて宿舎に向かいます。



宿舎に着いたらすぐに宿題に取り掛かります。祖父母の会の方が先生役です。



夕食後、何も言われなくても箸やコップは自分で洗いました。

「通学合宿」に関する情報は、県教育委員会社会教育課のホームページをご覧ください。

<http://www.pref.shizuoka.jp/kyouiku/kk-08/tuugaku.html>

人づくりちょっといい話

人を浴びて人となる

今日は五月十三日ですが、ちょうど一ヶ月前の四月十三日に、株式会社日管の社長さんで、浜松の名経営者と言われた三輪^{みわのぶいち}信一さんという方が亡くなりました。八十六歳でした。浜松近辺はもちろん、日本全国でも知られている方です。というのは、「^{しつけ}躰の日管」という面白い看板をビルに掲げていらっしやって、実際に社員に対する躰をきちんとなさっていたんですね。

それは、箸の上げ下ろしや歩き方、返事の仕方といった、社会人としての躰というよりも、どうやって仕事の中で自分を生かすか、ということのための躰です。自分を生かせば、人生がそれだけ楽しくなる。三輪さんは、一貫してずっと「躰の日管」でやっていらっしやって、大変な人格者だという印象があります。何度もお目に掛かりましたが、教えられることがたくさんありました。

三輪さんは、「この本を人に読んでもらいたい。自分だけが読んで感動したのではもったいない」とお考えになると、ご自分のポケットマネーで本を百冊も二百冊もお買いになって、方々の知人にお分けになっているんですよ。私も十冊ほど頂きました。

三輪さんが、日本生産性本部から講演を頼まれたとき、自分みたいな人間がどうして日本中の経営者に講演ができるだろうか、と思われまして、^{みそぎ}禊をするつもりで、当時の山口県の長府製作所の尊敬する社長さんのところへ、浜松からわざわざ教えを請いに行かれました。その社長さんがいろいろなことを教えてくださいますが、日常的に非常に身を慎まれる方で、会社の車に乗ってお料理屋などに行くと、「運転手さんを待たせるのはかわいそうだ。そういうことを日本中の社長がやっているけれど、運転手の身になったことがあるのだろうか？」というお話をされるんですね。

三輪さんはとても厳しい方かと思ったら、しょっちゅう人に会って、勉強していらっしやる。そのことを「人は人を浴びて人となる」とひと言でおっしゃるんです。教育、あるいは人づくりとは、こういうことなんですね。

これからはぜひ地域社会で、あるいは家庭同士で、子どもたちになるべく人を浴びるような機会をつくってやってほしいと思うんです。三輪さんのように本をあげるということは、もらった人がその本を読むことによって、その本を書いた人の人格を浴びることになるんですね。水掛け遊びというものがありますが、人格の水掛け遊びみたいなものをしてはどうでしょうか。

草柳大蔵著「続・午前8時のメッセージ」(平成14年)より



- 提言の「社会と人間」に関わる取組の一つが「地域の青少年声掛け運動」です。
- 規範意識やマナー、公共心の低下など、青少年の問題点を指摘する声が多く聞かれますが、彼らの姿は大人や社会を映す鏡であるともいえます。地域で生活している青少年に、周りの大人の誰もが温かなまなざしを向け、声を掛け、積極的にかかわることを通して青少年の健やかな成長を支援しようというのが運動の趣旨です。
- 大人から進んで挨拶する、ほめる、叱る、認める、感謝する、考えさせる、注意する等、地域の大人が様々な声掛けをすることで、積極的に青少年にかかわる社会を目指しましょう。
- この運動は平成12年11月に始まり、これまで19万人を超える県民の皆様にご参加いただいています(平成19年10月末現在)。さらに多くの県民の皆様にご参加いただき県民運動へと盛り上げることが人づくりの大きな力になると考えています。

声掛けは、相手のよさや頑張りを認めるメッセージ

まずは自分の周りの子どもたちに、温かなまなざしを向け、挨拶してみましよう。また、ほめたり、認めたり、感謝する言葉を掛けるのもよいでしょう。かわりができるに従って、心配な気持ちを伝えたり、考えさせたり、注意したり、叱ったりする声も子どもの心に素直に受け止められるでしょう。

一つ一つの声掛けは、「私たち大人は、あなたのよさや頑張りをちゃんと見ていますよ。応援していますよ。」という青少年へのメッセージになるのです。



「地域の青少年声掛け運動」推進街頭キャンペーンで運動への参加を呼び掛ける遠藤亮平教育長
(平成19年7月2日：青葉公園)

こんな時、こんな声掛けを(声掛けの具体例：少し意識してできる範囲で声を掛ける！)

- 近所、地域の子ども、知り合いの青少年、よく顔を見かける青少年に挨拶する。
- 乗り物等でお年寄りなどに席を譲った青少年をほめる。
- 地域で美化活動等、奉仕活動に取り組む青少年に感謝の声を掛ける。
- 仲間や相手にやさしくしたり、交通ルールを守ったりしている青少年の行為を認める声を掛ける。
- 自転車の二人乗りや無灯火など交通ルールを守らない青少年を注意する。
- 夕方遊んでいる子どもに帰宅を促す、あるいは気を付けて帰よう言葉を掛ける。

「地域の青少年声掛け運動」に関する情報は、県教育委員会青少年課のホームページでご覧いただけます。
<http://www.pref.shizuoka.jp/kyouiku/kk-09/>

人づくりちょっといい話

踏み込んで引っ張り出す教育

今、静岡県では公立学校の教職員や教委関係者、教員OBが核となって、「地域の青少年声掛け運動」が実施されています。この運動は「美しい未来のために」と題された青少年健全育成主要プロジェクトとして始められたもので、「美しい未来のために」、健やかな子どもたちを育てるために、具体的なプランとして声を掛けあおうというんですね。

考えてみると、これは大変なことです。最初のうちはお互いに恥ずかしがって、殊に声をかけられた方は、「うるさいな」とか「余計なお世話」とすねてみせると思うんですよ。でも、そう言われようが言われまいが、声を掛けるということは相手の心を開くこと、必ず分かってくれることだという自信をもって、繰り返し繰り返しみんなで行うことによって、声を掛けずに済むような子どもたちが必ず増えていくと思います。

実践が伴わなくては教育ではありません。教壇と机があるところだけが教育の場ではないのです。生きていくこと自身が教育なんですね。鳥や花から教わることもあります。しかし最も近いのは、お父さんお母さんから教わることであり、隣のおじさんおばさんから教わることであり、見ず知らずの人でも自分に声を掛けてくれた人から教わった言葉、それも私は教育なんだと思うんです。

「教育」を意味する「education」という言葉があります。「引っ張り出す」という意味だといわれてきましたが、もう一つ「踏み込む」という意味もあります。よくよく考えたらそうですね。踏み込まなきゃ引っ張り出せないじゃないですか。踏み込まないで何を引っ張り出そうというんですか？

声を掛けて、「うるさいな」と言う子もいるだろうし、「うん、わかったよ」と言う子もいるでしょう。あるいは、声を掛けてくれたおじさんなりおばさんなりがとても感じがよかったので、「ああ、僕一人じゃないんだな。だれかがこうやって見てくれるんだな」と思う子もいるんだろうと思うんですね。

子どもの心、若い人たちの心の中には、「本当はこうしたいんだよ。でも恥ずかしいからできないんだ」とか「うちの親が嫌だからできないんだ」といった気持ちがあると思います。それを、声を掛けることで踏み込んでいって、そこから引っ張り出す。「さあ、立って歩いてごらん」。これが大切なのではないのでしょうか。

でも人間って誰でもテレ屋じゃないですか。子どもたちにだって「君、どうしたの」って声を掛けられない。どうです、「おばあさんもさあ、あんたたちのころにはワルだったなあ」って、子どもの方から踏み込める心をひらいてみては。

草柳大蔵著 「続・午前8時のメッセージ99話」(平成14年発行)

人づくり推進員・地域・団体の取組



子どもと家庭

美しく挨拶しよう（掛川市立原田小学校児童会・PTA）



- 「人づくり百年の計委員会」提言では、「美しく挨拶しよう」が提案されています。提言では、挨拶には次のような効果があると説明しています。

■大人が美しい挨拶をする

→子どもは自分が大事にされているという感情をもち、「自尊心」が育つ。

■家族の中で“美しい挨拶”を交わす

→子どもも美しい挨拶をするようになり、知性が発達する。

- 「美しい挨拶」は、社会においてさまざまな人と関わる中で各自が考えていくものです。まずは、社会の基本単位である家庭において「美しい挨拶」とはどういうものかを楽しく模索しましょう。

掛川市立原田小学校児童会・PTA「あいさつパワーアップ作戦」

掛川市立原田小学校の児童は、朝の登校時、出迎えた先生方に気持ちの良いあいさつをしています。張りのある声であいさつする子や、立ち止まって相手の目をみてあいさつする子が大半です。中には、路地を曲がって先生の姿が見えた途端、50mくらい先から「おはようございまーす」と声を響かせた3人組の女子児童もいました。児童会やPTAを中心としたあいさつ運動の成果が、このような子どもたちの姿となって表れています。

今年度、PTAは「家庭におけるあいさつの励行」を重点テーマに掲げ、学校や児童会と連携して「あいさつパワーアップ作戦」を行っています。まず、誰にあいさつしたかを記入するカードを各家庭の冷蔵庫に貼り、子どもが自己評価をする機会を設けました。次に、PTA有志が縫製した40本ののぼり旗に、異学年の児童がペアを組んであいさつの標語や児童会考案のキャラクターを描いて通学路に掲げ、意識の高揚を図りました。手作りののぼり旗を定期的に家に持ち帰って洗濯や補修することも、親子であいさつの大切さを再確認する機会になりました。また、駐在所の巡査が毎朝街頭指導するなど、地域も運動を後押ししています。

まず家庭という「小さな社会」であいさつができるようにする。それを学校や地域という「より大きな社会」で実践していくという姿勢が、「美しい挨拶」を徐々に形作っていくのです。原田小学校の取組は、そのことをよく示しています。



のぼり旗を縫製するPTA有志の方々。
明るい表情で作業に取り組んでいます。



児童が標語や絵を描いたのぼり旗。
描いた児童の名も書かれています。



学校への入り口であいさつする児童。
校長先生にしっかりと顔を向けています。

「美しく挨拶しよう」など、県の人づくりの基本理念については、「静岡県の人づくり」ホームページをご覧ください。
<http://www.pref.shizuoka.jp/kenmin/km-240a/>

人づくりちょっといい話

挨拶は心の定期預金

中村諭先生という方がいらっしゃいます。この先生は教員生活 31 年のうちの 23 年間で、崩壊寸前の学校ばかりに教諭、教頭、学校長として派遣されました。中村先生は、「組織や集団の秩序を回復したいと思ったら、一番最初にするのは挨拶じゃないか。当たり前のことだ。」とあって、学校で生徒の顔を見るたびに、「おはようございます」「こんにちは」「さようなら」「元気？」などと言いつけるんですね。

最初は、生徒の方が変な顔をして、そっぽを向いて足早に去っていきます。そのときに「こら、待て。」おまえは何で挨拶をしないんだ？」と言っはいけないというんですね。そうではなく、それでもニコニコして「おはようございます」と言いつける。「挨拶は心の定期預金だ」と言うんですね。「必ず相手の心に積み重なっていく。相手は気持ちの負担を感じて、小さい声で『おはようございます』と応えるようになる。」というんです。

中村先生の赴任された学校は、宝塚市内の中学校で、この 20 年間の犯罪件数が、毎年市内でナンバーワンという学校だったんです。それが、挨拶を続けていくことですっかり穏やかな学校になって、よその人が校門を入れて来ても、「こんにちは」と生徒の方が挨拶をするような学校になったといひます。

中村先生に転任の時期が来て、いよいよ学校を去ることになりました。最後の卒業式で、代表が謝恩の辞を述べるのですが、途中で自分が感極まってしまっ、全くのアドリブになってしまうんですね。少し読んでみます。「数え切れないほど言い争いをして、先生には迷惑を掛けてしまいました。でも、それも俺の中ではめっちゃ良い思い出になりました。先生の方も『良い思い出ができた』ということにしておいてください。これからも、俺みたいな問題児が現れるかもしれないけど、挫けずに頑張ってください」と言うんですね。その後、今度は生徒会長が立ち上がって「僕たちの気持ちです。先生、どうぞ受け取ってください。」と言うんです。「何だろう？」と思っ立っていると、ピアノの前に生徒が座って『仰げば尊し』を黙って弾き、学生の大合唱が始まった。もちろん、先生も生徒もボロボロ泣いてしまったそうです。(中略)

「一波は動かす、四海の波」、ひとつの波が動けば、海の波は動くんですね。何もしないで、「言葉つきが乱暴だ」「すぐキレル」「危ない」というだけで、子どもたちに対して距離感を持ってしまっ。それが一番の大きな問題なんです。なぜ大人が踏み込んでいけないのでしょうか。そうやって、分かってくれる子、つまり、お互いに心を交換できる子を増やしていくことによって、つっぱっていた子が、「つっぱっていてもつまんねえよな。」と、必ず応えてきます。根っからの悪い子なんていないんですよ。私はそこをもう一度考えてみたいという気がします。(後略)

草柳大蔵著「続 午前 8 時のメッセージ」(平成 14 年発行)より



○人づくり推進員は、小・中学校を会場に、保護者・教職員・地域住民を対象とした「人づくり地域懇談会」を開催しています。小・中学校での開催回数は、平成12年度から19年度までの8年間で、延べ1,020回に及びます。

(参考) あらゆる対象を含めた懇談会開催数は1,775回です。

○懇談会では、推進員が「意味ある人」や「しつけの静岡方式」など、「人づくり百年の計委員会」提言の説明をしたり、しつけや子育てについて参加者と意見交換をしたりしています。

○昨年度までは、一つの懇談会会場に一人の推進員が出向くことがほとんどでしたが19年度からは、推進員のネットワークを活用し、複数の推進員で会場を訪れ、テーマごと推進員が話をしたり、小集団に分かれてグループ協議を行ったりするなど、よりわかりやすく、充実した懇談会になるよう努めています。

伊豆の国市立葦山南小学校における人づくり地域懇談会 ～推進員によるテーマ別講話～

平成19年6月5日(火曜日)、伊豆の国市立葦山南小学校(山田裕美校長)で人づくり地域懇談会が行われました。家庭教育学級の開級式での懇談会ということで、1年生から6年生の保護者約40名が参加しました。講師は、渡邊公人推進員、小沢晃推進員、中田保子推進員の3名です。

講師依頼を受けた渡邊推進員が、人づくり推進員ネットワークを活用し、他の推進員に連絡を取り、家庭教育学級担当者と事前打合せを重ねて、当日3名の推進員で会場を訪れました。

懇談会では、最初に3名の推進員が15～30分ずつ3つのテーマで講話しました。渡邊推進員は、「静岡県の人づくり」というテーマで「人づくり百年の計委員会」と提言について、小沢推進員は、「しつけの静岡方式」というテーマで、挨拶をすることや活字を読むこと、親子が会話することの大切さについて、中田推進員は、「改正教育基本法からうかがえる家庭教育の大切さ」をテーマに講話されました。

講話の後、その内容を受け、参加者は、「子育てをされていて、日ごろから悩んでいることや困っていること、わからないこと」などを出し合い、推進員を交えての意見交換をしました。

推進員は、自分の経験や失敗談なども交え、参加者の質問に対してアドバイスをしました。

参加者からは、「1人ではなく3人も講師が来てくれたので、いろいろな考え方や体験談などが聞けて、とてもよかった。」「推進員の方々がそれぞれ失敗談を語ってくれたので、親近感を覚えた。」「もっと意見が言いたかった。講話の後、更にグループを分けて少人数にしたほうが、もっと意見が出ただろう。」などの感想・意見がありました。

和やかな雰囲気の中での推進員と参加者の真剣な話し合いの様子から、葦山南小学校区の方々の人づくり、地域づくりの日ごろの姿が感じられました。



テーマごとに講話する推進員



互いの顔を見ながら、真剣な話し合いをする参加者たち



和やかな雰囲気の中で進んだ懇談会

人づくりちょっといい話

子どもの心の栄養剤

優れた教育者、森信三先生が、「どうしようか……」と驚いたことがあります。それは尼崎の武庫川小学校で『もう、死にたい』と思ってる子いる？手を挙げてごらん』と言ったら、教室の中の四十六%の子が手を挙げたというんです。青森県の黒石町でも四十%近い子が手を挙げたといいます。

どうしてなのでしょう。子どもたちは「父親や母親を心配させまい」と小さな心にそれなりの配慮というものを持っていて、父親や母親がいろいろと言ってくれることを全部善意に解釈して、その善意を自分で内面化している。その内面化したものを「振り」に変えるんですね。いい子振る。勉強してみせる、親の言うことを聞いてみせる。「こんな勉強面白くない」「本当は分からない」ということを、「ねえ、だから教えてよ」と言いたいんだけど、それを言うと親が心配するだろうから黙っている。子どもころから、父母の要求が高ければ高いほど、子どもの配慮が働いてしまうんですね。これをロールプレイというのですが、いい子振るのを続けているうちに嫌になってきて、キレるか自殺するかのどっちかになってしまうらしいんです。

こうした問題を、どうやって解決するかというので、千葉県のある町では、学校区を十四に分け、その十四の地域の中で和太鼓とか合唱クラブとかお祭りなど自分たちで始めることにしました。「クリーン作戦参加運動」というものもあります。「自分たちの地域の中には吸い殻一本落ちていないような町にしたい」と。それぞれ小さな地域になりますが、一つ一つ目標を持って、子どもを巻き込んで、子どもを中心に働いてもらって、子どもたちに本当の姿を見せる。親たちも本当の姿で接する。そういう活動を始めたんです。

このことから、三十年ほど前に、香川県高松市の栗林公園に行ったときのことを思い出しました。私は朝六時にジョギングに行ったんですが、長い列ができています。前の日に観光客が落としていったごみを市長を先頭にして拾う運動だったんですね。何年も続いたそうです。もう市長は変わっていますから、実際に今もそれがあるかはわかりませんが。毎朝ごみ拾いに市長さんと行くことを、「俺は行ってるんだぜ」とだれも言わないんですね、つまり陰徳。善いことをしていても「私が、私が」と言わない。それで善いことを当たり前のことのレベルにまで引き上げる。そこで人格の完成が生まれるということなんですね。

この精神は、先程ご紹介した千葉県のある町で、十四の地域がそれぞれにやることをやっても、人に見てもらおうとか「こういうことをしている」といった自己主張をしないことと、通じると思います。こういうやり方も、子どもの心の成長に大きな栄養剤となるのではないかと思います。

草柳大蔵著「午前8時のメッセージ99話」(平成13年発行)より



○人づくり推進員は、幼稚園児や保育園児の保護者を対象とした「人づくり地域懇談会」を開催しています。子育てに関する講話や意見交換を中心としています。幼稚園・保育園等での開催回数は、平成12年度から19年度までの8年間で、延べ127回に及びます。

○人づくり推進員は、市町の教育委員会等と連携して、子育てに悩む若い世代の保護者の力になれるよう、さまざまな活動を行っています。

三島市 人づくり地域懇談会 ～テーマ別 分科会～

三島市では、市内14の公立幼稚園の保護者を対象に、「人づくり地域懇談会」を開催しました。三島市教育委員会が市内公立14園の保護者に呼びかけて参加者を募り、市内3会場3回に分けての懇談会となりました。(9月20日 中郷文化プラザ、10月10日 北上文化プラザ、10月23日 三島本町タワーにて開催)

講師は、三島市の石田嘉文推進員、齊藤毅推進員、甲斐幸博推進員、西島玉枝推進員の4名です。最初に一人の推進員が基調講演をしました。9月20日の中郷文化プラザで基調講演を行った石田推進員は、県の人づくり事業の全体説明や「人づくり百年の計委員会提言」の趣旨などについて説明をしました。

その後、3つのテーマごと分科会を行いました。「子どもの食と生活習慣」の分散会を石田、西島推進員が、「子どもと言葉」の分散会を齊藤推進員が、「子どもと運動」の分散会を甲斐推進員が担当しました。それぞれの推進員が、テーマに関する話をした後、参加者からの質問に答えていきました。懇談会を終えた参加者からは、次のような感想が聞かれました。

「幼稚園では、親同士がテーマに沿って意見交換をする機会はほとんどありません。しかも今回は、日ごろ顔をあわせている、わが子が通う幼稚園以外の、地域を越えた人との意見交換でした。幼稚園で仲のいいお母さんと話をしても、『そうよね～』で終わってしまいますが、今日の会では、こちらの悩みや考えに対して、講師(推進員)の方がしっかりとした答えを示してくれました。日ごろ考えたり、思ったりしていることを真剣に考えるいい機会でした。」

人づくり推進員は、各市町人づくり担当課と連携して、地域の方々の力となるよう努めています。



家庭での言葉遣いの大切さを語る推進員



基調講演を真剣に聞く参加者



テーマごと活発な意見交換がされた分科会

人づくり推進員の情報は、「静岡県の人づくり」ホームページでご覧いただけます。

<http://www.pref.shizuoka.jp/kenmin/km-240a/>

人づくりちょっといい話

お母さんと赤ちゃんの目の距離

アマラとカマラの話をご存じでしょうか。狼に育てられたインドの姉妹ですね。アマラが七歳、カマラが二歳です。狼に育てられた結果、彼女たちは肩や胸に長い毛が生えて、四足で走って、話し声は「ウォーウォー」しか出せなかった。発見されて人間の社会に連れ戻して適応させようとしたのですが、とうとう適応できないまま亡くなってしまう実話です。

このように、人間は、環境に見事に適応してしまう能力を持っているわけです。人間から見れば「アマラとカマラは何と悲惨な運命だろう」と思ってしまうでしょうが、彼女たちの立場に立ってみれば、見事に適応して、狼の仲間の中で暮っていたということですね。人間には社会に適応するだけでなく、自然に適応するという素晴らしい能力があります。その力が環境にちゃんと折り合いをつけていることを得てして忘れて、無理矢理に自分に努力を強いたり、「環境が悪いから、自分は何も才能が発揮できない」と決め付けたりするんです。

実際は人間の体は良くできているらしく、ある実験によれば、例えば、人間がベートーベンの音楽で心安さを感じるのは、周波の上と下を切った狭い幅の中だそうです。音階で言うと、高音部記号の五線の下のラから上のラの範囲。赤ちゃんは、中央のラで泣くそうです。すると、お母さんが「よしよし」とか「どうしたの？」とやって来ますね。お母さんはさっき言った一番人間として快い感じの音程で赤ちゃんに語りかけてるんだそうです。「あらあら、どうしたの？」と、赤ちゃんにとって一番快い音程で語りかけられると、赤ちゃんの体温がスーッと下がるそうです。

母親と赤ちゃんは、初めから命同士が相呼応するようにできているのでしょうか。おっぱいを飲ませる時に赤ちゃんを抱きますね。そして赤ちゃんが飲んでいて、ふっと乳首から口を離してお母さんの顔を見る。その時の目とお母さんの目の間の距離が大体、二十五センチから二十八センチ。お母さんの目というのは赤ちゃんにとって最初の情報なんですね。これが最も快い情報なんだそうです。ああやって、おっぱいを飲ませるのに抱いて乳を含ませる。赤ちゃんが泣いたら「あらあら、どうしたの？」と言って駆け寄る。実験や理論を全く知らなくても、自然に最適条件で母と子がお互いに命のやり取りをしているんですね。

今、静岡で人材開発の仕事をしております。何も難しいことではないんです。赤ちゃんとお母さんの目の距離です。それから、一番人間が快い音のラです。ラのところで赤ちゃんは泣くということです。お母さんが「あらあら」と駆け寄ると赤ちゃんの体温が下がるということですね。これ、命の話です。信じていこうではないですか。

草柳大蔵著「午前8時のメッセージ99話」(平成13年発行)より



○県内には**9つの「人づくり地域協議会」**があります。人づくり推進員が地域ごとにまとまり、情報を共有しながら、**地域の実情に合わせた活動プログラムを展開**することをめざしています。

○このうち「伊豆地域 人づくり協議会」では、平成19年度に地域の有識者を招き、しつけや家庭教育について考えるための講演会・意見交換会を開催しました。家庭教育について多くの知見を得る機会となりました。

※人づくり地域協議会

平成17年度に設置した「創知協働 人づくり推進県民会議 『意味ある人』実践部会」において、「“意味ある人”を広く県民に普及し、人づくり県民運動を盛り上げる」方策について検討が行われ、その一つとして「人づくり推進員のネットワーク化等による県民の多様な実践活動の促進」が提言されました。この提言を受け、昨年度、人づくり推進員を中心に**県内5地域9グループのネットワーク化**が図られました。

（伊豆・東部A・東部B・中部・志太榛原・中東遠・西部A・西部B・西部C）

伊豆人づくり協議会講演会・意見交換会

平成19年10月10日に賀茂教育会館において、下田市河井医院副院長 河井榮先生を講師に招き、伊豆地域人づくり協議会主催の講演会・意見交換会が行われました。参加者は、伊豆地域人づくり推進員と伊豆地域市町人づくり担当課、及び人づくり推進員の関連団体関係者の合計33名です。

河井先生は、「美しく生きるとは？」をテーマに、医学的な資料や診察に訪れた親子の事例などを紹介しながら、「人づくり」についての御自分の考えを講演されました。医学的な資料やデータを基に話された、子どもの発達段階ごとの特徴や適切な接し方についてのお話は、大変説得力のあるものでした。子どもの成長には、親がしっかりと基本的な生活リズムをつけてやることと食育が必要であり、「早寝早起き」「朝ごはん」「リズム運動(歩く、走る、呼吸)」の3つが、子育てにおいて大切だと話されました。

最後に、自殺未遂をした15歳の少女が「自分は生きている意味がない」と言った事例を紹介しながら、「『意味ある人』づくりとは、生きている意味がないと思う人をつくらないことではないでしょうか」とまとめ、人づくりにおいて自尊心を育むことの大切さを訴えました。

参加者からは、「このような視点で『人づくり』について考えたことはなかった。大変勉強になった。」「『人づくり』について、自分なりに整理のつかない部分があったが、先生のお話で、とてもすっきり整理された。」などの感想が聞かれました。

人づくり推進員が中心となり、各地域で人づくりの輪が少しずつですが、確実に広がっています。



講師の河井榮先生



真剣に話を聞いている参加者

人づくりちょっといい話

「雑草という草はない」～昭和天皇のメッセージ

長い間昭和天皇の侍従をされた入江相政さんという方が編まれた『宮中侍従物語』という全八冊の文庫本があります。

読み出したら寝られないくらいに面白い本で、文章もうまく、軽々と書きながら天皇皇后両陛下の人間的な内容、微笑みの一つまでお書きになっています。その中から、昭和天皇のお人柄と、「命」の大切さに触れるエピソードをご紹介します。

天皇がお住まいになっている御座所の前のお庭一体のことを『広芝』といいます。その広芝にキジやコジュケイが盛んに来て、とても楽しい風景になるんだそうですが、いろいろな植栽があって広々としているものですから、草の種が飛んできて夏になると草がボーボーになるらしいのです。

ちょうど、両陛下は夏休みは那須の御用邸か下田にいらっしゃって、秋口にお帰りになる。お帰りになって草がたくさん茂っていたらお見苦しいだろうと、侍従たちは、その草を刈ることにしました。

しかし戦後のことで人手が足りなくて、間に合わなかったのですね。陛下がお帰りになった時に、入江さんが「真に恐れ入りますが、雑草が生い茂っておりまして随分手を尽くしたのですがこれだけ残ってしまいました。いずれきれいに致しますから」とお詫びをしました。

すると陛下は、かつてお見せになったことがないほどのキツイ目をきらりとされて、「何を言っているんでしょう。雑草という草はないんですよ。どの草にも名前はあるんです。そしてどの植物にも名前があって、それぞれ自分の好きな場所を選んで生を営んでいるんです。人間の一方的な考えで、これを切って掃除してはいけませんよ」とおっしゃったというんですね

どの草にも名前があります。どの草にも命があります。命どおりに自分たちの生きる場所を選んで生を営んでいるんですね。やっぱり生き物すべてにおいて、自分で生きる場所や道筋を選ぶことが、内なる情報として入っているんでしょう。父がどうしてくれる、母がどうしてくれる、先生がどうしてくれる、会社がどうしてくれるではないんです。

私たちは気が付かないで「なるべくなら教えてやればいいんだ、マニュアルを作ってやればいいんだ」と思ってしまいます。そうではなく「お前にはお前の命があって、命どおりに生きていっていいんだよ」というメッセージを先に与えて、「こういうことはあまりやならい方がいいよ、こういうことはやっpegらん」というメッセージを更に重ねていくといった姿勢が大切かなと思います。

草柳大蔵著 「午前8時のメッセージ 99話」(平成13年発行)より



- 人づくり推進員は、県内5地域9グループに分かれてネットワーク(人づくり地域協議会)を組織し、地域の実情にあった人づくりを進めています。
- 西部地域Cグループの人づくり推進員7人は、「若い親への力になりたい」「子育て真っ最中のお父さん・お母さんに、子育てのヒントを示したり、親子のふれあいの場を設けたりするなど、何らかの支援をしたい」という思いから、各推進員の得意分野や経験を生かした提言普及のためのイベント「人づくりの玉手箱」を企画しました。親子が楽しみながら、家庭でのしつけを振り返り、子育てに関する悩みの解決や子育ての目標作りのきっかけになるようなイベントをめざしました。企画の趣旨に賛同した、静岡県出身の歌手ユズリンさんも出演することになりました。

人づくりの玉手箱

平成20年3月9日(日)、浜松市立雄踏小学校体育館を会場に、「人づくりの玉手箱」が開催されました。親子連れでの参加を呼びかけ、浜松市西部、新居町、湖西市から約150人が集まりました。倉田推進員からの「提言」の説明に続き、4つの「玉手箱」が開きました。

第1部は「おはしの玉手箱」です。箸の持ち方やおじぎの仕方など、生活の基本となる礼儀作法について菊池澄恵推進員が説明しました。自分の使っている箸を持参した参加者は、親子で持ち方を確認していました。菊池さんは「自分の箸でつかみ、口に入れるという行為をもっと大切にされた方がいい」と「作法」の大切さを強調していました。

第2部は「おはなしの玉手箱」です。和久田せつ子推進員が「三枚のお札」の語り聞かせを行いました。ピアノの生演奏による効果音も入った臨場感あふれる語りに、参加者は引き込まれるように聴いていました。また、「花さかじいさん」など、歌を通じて昔話のあらすじがわかることも紹介してくれました。

第3部は「紙ひこうきの玉手箱」です。宮崎順孝推進員の紙飛行機の作り方の説明に合わせ、親子で教えあったり、確かめ合ったりして作りました。できあがった紙飛行機をみんなで飛ばし、親子で一緒に作った「手作りの物」で遊ぶ楽しさを十分に味わいました。

最後は「うたの玉手箱」です。ユズリンさんが「きつとできる」「きみとぼくの間に」などの曲を歌いました。親子や隣同士で手をつないだり、体をゆすったり、踊ったりして、楽しいひとときを過ごしました。人と人とのつながりや親子のふれあいを大切にするという、ユズリンさんのメッセージが伝わってくるステージでした。

「人づくりの玉手箱」が終わり、笑顔で帰路に向かう親子の姿に、人づくり推進員の皆さんは目を細めていました。



和久田推進員の語り聞かせ



お箸の持ち方を確認しあう親子



地域の方々にボランティアで協力してもらいました

人づくりちょっといい話

「身体感覚」をみずみずしくする時間を

前回、周囲の大人や年長者がステージを与えることによって、子どもの可能性がいつべんに開花するというお話しました。それとともに、「身体感覚」をいかにみずみずしく豊かに伸ばしていくかが人間の基本的なテーマなんだと、村瀬ありさんの作文で思い知らされました。

「森ってというのは木があるから森というだけじゃないんだ。生き物を生かしているのが森なんだ」といった認識を自分でつかまえるんですね。これを「身体感覚」といいます。体がかまえるんですね。

人間が生きていくために一番基本的な感覚は「身体感覚」なんです。例えば、歩いているとなんとなく後ろから嫌な気配がする。振り向いてみるとすごい勢いで車が近寄って来る。だからパッと道をよける。こういう「身体感覚」、昔は「六感」なんて言いました。あるいは「統覚」と言った人もいます。感覚が一つにまとまってしまう状態ですね。

その一番基本的な「身体感覚」から、今の子どもたちは遠退いているのではないかと思います。自然と接したり、自然の営みを自分の目で見たり耳で聞いたりする、それによって蓄積される「身体感覚」から、また、「身体感覚」を与えられる場面から、引き離されているのです。

しかも、学校で教えるのは「数字感覚」であり「文字感覚」です。子どもたちは、家庭と学校と塾という三角形の中を往復するだけの毎日で、「記号感覚」、つまり数字と文字の感覚をあおられ、あるいはTVやゲームなどの人工的に作られた「人工情報感覚」にどっぷりつかっているのが現状です。

私も静岡県で人づくりについてお手伝いをさせていただいております。考えてみるとこれは実におもしろく、大変意味があり、責任の重い仕事なんですね。なぜなら、子どもたちが言語であり数字である「記号感覚」に接している時間は長いのに、「身体感覚」を身に付ける時間は実に短いからです。

本当は、人づくりの基本というのは「身体感覚」というものをいかに引き出してあげるかなんですね。「身体感覚」のみずみずしい人間内容ができることによって、その主体の中に入ってくる数字や記号も、丸暗記でなく自分で納得しながらその記号情報を読み取るようになると思うんです。

皆さん方、お母さんもお父さんも、週に1回でも2回でも暇を見つけて、そして子どもたちも(あなた自身もです)「身体感覚」をみずみずしくする時間を一日の中でおつくりになってください。お願い致します。

草柳大蔵著 「午前8時のメッセージ99話」(平成13年発行)より



○県では、家庭における人づくりの柱のひとつに「食育の推進」を掲げ、正しい食習慣や、家族と一緒に食卓を囲んでコミュニケーションをとることの大切さを訴えています。

○平成19年3月に作成された「静岡県食育推進計画」では、「食を知る」「食をつくる」「食を楽しむ」ことを通して望ましい食生活を身につけ、健全な心と身体を培い、豊かな人間性をはぐくむことを目指しています。「0歳から始まるしずおかの食育」を合言葉に県民部、厚生部、産業部、教育委員会などが連携して食育に取り組んでいます。これを受け、各地域でも食育の推進に努めています。

岡部町「週1回、家族そろって“いただきます”」

岡部町では、教育委員が中心となって、週1回家族そろって食卓を囲み、テレビを消しておしゃべりをしようという運動を進めています。保育園、幼稚園、小・中学校、PTA、青少年健全育成会、民生児童委員、老人会、自治会などの団体に協力を求め、町ぐるみで取り組んでいます。特に、町内の全小・中学校では、4月に啓発パンフレットを配布し、夏休み前には全校の児童生徒に対し「休み中、家族そろって食べられるよう、親にお願いしよう。」と改めて呼びかけるなど、定期的な働きかけを行っています。半年が経ち、親子双方から「家族間の会話が増えた。」「皆で食べた方がごはんがおいしい。」という反応も聞かれるようになりました。

自らも人づくり地域懇談会で食育に関する普及啓発に努める教育委員長の西脇多鶴子さん（人づくり推進員）は、「ひと昔前までは、『ごはんですよー』の言葉は家族集合の合図でもありました。今は帰宅時間がそろわず、食事も皆ばらばらでとってしまいます。食卓は空腹を満たすという至福の時間を共有する場であるとともに、家族の状態を確かめる場であり、会話から価値観や地域の情報など多くの事柄を身につける場です。食卓が果たしてきた機能を取り戻すために、まずは最低でも週1回、家族がそろって食卓を囲めるよう運動を続けていきます。」と熱く語っていました。

朝食、夕食はそれぞれ年間365回あります。食卓は、親が子どもをゆっくりと、しかし着実に成長に導いていく場です。毎日の食事を少し見直すことが人づくりにつながることを、岡部町の取組は示しています。



上) 運動の趣旨を説明する西脇推進員
左) 岡部町教育委員会作成のポスター



町内のある家庭の食卓の風景。お父さんが撮影していますので実際は5人です。皆さんいい表情をしています。

「静岡県食育推進計画」は、健康増進室のホームページで御覧いただけます。

<http://www.pref.shizuoka.jp/kousei/ko-430/kenzou/index.html>

人づくりちょっといい話

家族の活性化のために

浜崎タマエさんという家庭科の先生が、一九九七年に「子どもが見つめる『家族の未来』」（農山漁村文化協会）という本をお出しになりました。面白いことに、そのころスーパーとコンビニの売り上げが逆転したんですよ。コンビニの方が家庭に近づいて、今までの大きいスーパーがコンビニに売り負けたときなんです。食事をするのから何から、全部コンビニで買ってきて家族が生活をするようになってくる。そういう状態を便利がってばかりいないで、「朝昼晩と、コンビニのデリカテッセンで買ってきて、チンすればいいだけのお料理を食べている家族って何だろう」と考えるところから、家族を客観視するという授業をやってみたんです。これは非常に面白い記録なんです。

それからもうひと方、吉田カズコさんという方がいらっしゃいます。彼女も「欠損家族の認識」というところから、「今の家族というものは、家族としてはまとまっているんだけど、あんまり近所づきあいもないし、旅行もしないでいる。社会から非常に縁遠い人間のグループになっているのではないだろうか」と考えたんです。

例えば、あるとき中山間地帯、たくさん木が生えていて、川の水がまだきれいで、そして民家がポツポツとあるのだけれども、おじいちゃんおばあちゃんしか住んでいないというところ、そういう中山間地帯に行ってみて、そういうところに住む人たちはどうやって暮らしているのかと見てみると、まだお風呂を薪で焚いたり、ご飯をかまどで炊いたりするんです。「ちょっと食べさせてください。」と行って食べてみると、漬物もその家の漬物だし、ご飯もその家のご飯だし、おいしいんですね。「ああ、これが生活だったんだな」とわかる。今の私たちの生活というものは、便利ということだけの生活で、生活を通して家族がお互いにぬくもりを感じ合うとか、「家族であってよかったね」という気持ちの交換があるとか、そういうことをしている暇がないんじゃないか。

こうして家族の客観視というものをやってみる。そうすると、自分たち自身を駄目な家族と考えてみたり、孤独な家族と考えたりしないで、自分たちは一つの生活のタイプを取っているに過ぎないのではないか、ととらえることができる。それではもったいないから、いろいろなところに小さい旅行をしてみよう、あるいは違う環境に暮らしている人を訪ねてみよう、と家族自身が自己モニターを始めるんです。これが実は、家族の活性化につながっていくんですよ。

草柳大蔵著「続・午前8時のメッセージ99話」（平成14年発行）より



○「人づくり百年の計委員会」提言では、「きれいな学校」の項で次の2点を述べています。

■学校をきれいにすることで子どもにも「自分たちの学校」という意識が生まれ、感謝の気持ちや道徳心が育っていく。

■大人が街をきれいにする姿勢を子どもに見せれば子どもの行動も変わる。

○多くの職場実践されている5S運動(整理・整頓・清掃・清潔・躰または習慣化)や、自分の家や店の前を毎日掃き清める行為など、環境美化は様々な場所で見られます。多くの方が環境美化の意義を子どもたちに説明し、手本を見せることが人づくりの実践活動になると言えます。

泉陽中学校の取組「磐周一きれいな学校～トイレ掃除に学ぶ」

泉陽中学校(全校生徒77人)では、前期生徒会役員が「磐周一きれいな学校」をスローガンに掲げ、平成19年3月に行われたリーダー研修会では校内のトイレ徹底清掃に取り組みました。「人の嫌がることも率先して行うのがリーダーだ」と考えてのことです。本部役員、専門委員長、学級委員、部活の部長に自主参加の生徒を加えた30人余りの生徒が手にスポンジを持ち、地域で清掃活動を行う「森町掃除に学ぶ会」の指導を受けながら一生懸命便器を磨きました。

始めは抵抗感があった生徒も段々夢中になって取り組んだそうです。参加したある生徒は、「臭いのしないトイレはすがすがしく、『楽しさ』や『優しさ』や『やる気』を与えてくれる。毎日使う教室やトイレはきれいにしておかなければならぬことを実感した。」「自分から始めなければ何も変わらないことも痛感した。」「次はどこをやればいかと、自分から気付いて掃除ができるようになった。」と、感想を述べています。放課後の校舎内を見学しましたが、築20年の校舎とは思えないくらい、教室もトイレもきれいでした。

学校だけでなく、地域をきれいにしようと、8月には生徒会の呼びかけに41人が参加して、学区内の2小学校のトイレ掃除を行い、さらに3月には地域の幼稚園に出向いてトイレ掃除をしました。生徒たちは「次に何をやればいいのかに気付く」「自分から始めなければきれいにならない」「人の嫌がることも自分のためにする」ことをトイレ掃除から学び、現在、後期生徒会が「県下一きれいな学校」を掲げて実践を続けています。「何かができる」「精神的な自立」「思いやり」という「意味ある人」の3条件がここに現れているのではないのでしょうか。



19年8月に行った学区内の三倉小学校のトイレ掃除で便器を磨く生徒



トイレ掃除の後に「森町掃除に学ぶ会」の皆さんと集会を開き、感想を語る生徒



昨年1年間を漢字1字で表してもらったら、生徒の1位は「美」でした。きれいな学校への関心の高さがうかがえます。今年もきつと・・・

「きれいな学校」など、県の人づくりの基本理念については、「静岡県の人づくり」ホームページをご覧ください。
<http://www.pref.shizuoka.jp/kenmin/km-240a/>

人づくりちょっといい話

受け継がれていく教え

戦前からよく読まれていて、私も三十年くらい前に「この本は読んでおけよ」と先輩から薦められた中国の本をご紹介します。呂新吾^{りよしんご}という人の『呻吟語』^{しんぎんご}という本です。とても面白い言葉がたくさん出てくるのですが、「世教」という言葉を取り上げてみたいと思います。

呂新吾という人は、明の時代の学者なのですが、一五三六年から一六一八年まで、つまり十六世紀から十七世紀の初めを生きただけの人です。長生きをして、八十三歳で亡くなっています。三十九歳で国家公務員試験に合格しました。昔の中国の国家公務員試験は、ものすごく難しかったんですね。「進士」といいますが、その試験に合格したわけですね。彼は、「資性魯鈍^{しせいろうどん}なれども、澄心体認^{ちやうしんたいにん}の人」だったらいい。「本質的には鈍いけれど、非常に集中力があり、体を通じて、経験したことをしっかりと覚える人」という意味です。

彼は、国家公務員試験を通過して、行政官として地方へ行きました。県知事のようなものです。そこで三、四年行政官をして、また都に帰ってくるわけですが、彼が地方行政官として治めた土地は、明の時代が終わり清の時代になっても、「お嫁さんを貰うならあそこから貰え」「お婿さん探しをするのなら、あそこでお婿さんを探せ」と言われるぐらい、人心が良くなったというんですね。

彼は、「政治を行う上で一番大切な問題というのは、「世教」というもの、世の中に受け継がれていく教えというものを、政府も、地域社会に住む人も、みんなが力を合わせてつくり、そしてそれが失われないようにしていくことではないか」と言っています。

昔から、禅のお坊さんは「一花は開く、天下の春（一つの花が開けば、天下に春が一斉にやってくる）、一波は動かす、四海の波（一つの波が動けば、海全体の波が動き出す）」ということを行いました。この「一波は動かす、四海の波」の「波」というものを、「祈り」といってもよいし、「思いやり」といってもよいし、「老人介護」といってもよいし、「地域社会の伝統」といってもいい。そういった波を見つけて、「あのまちに行くとみんなが挨拶をするよ」とか、「みんながニコニコしてるよ」など、何か特色をもったまちづくりが、学校の総合時間などを中心としてできていくというのは、素晴らしいことだと思うんですね。

インドのタゴールというすてきな詩人が、「子どもと接するのに私心がなく、偏らず、彼らを花のように愛することができる。そういう国の国民ですね。日本人というものは、子どもを愛しているんだなと私は思いました」という詩を作っています。いいでしょう？こんな社会をつくってみたいものですね。

草柳大蔵著 「続・午前8時のメッセージ99話」（平成14年発行）より



- 「人づくり地域懇談会」において、「子どもと学校」がテーマとなった事例を紹介します。
- 「人づくり百年の計委員会」提言の「きれいな学校」「気持ちのいい子ども」「頼もしい先生」の各項目をテーマに小学校の先生方とPTA役員の皆さんが学校現場の視点から意見を出してくださいました。

沼津市立原小学校における人づくり地域懇談会

平成19年7月27日（金）、沼津市立原小学校において、人づくり地域懇談会が行われました。参加者は、小学校職員とPTA役員の計35人です。

まず、人づくり推進員の六車喜昭さんが、人づくり提言に関連して「世の中の良いことも悪いことも、全て人間の関わりの中で起こっていることです。その中で人はどうあるべきかを考えることが『意味ある人』づくりにつながります。」「『美しい』とは『羊が大きくなる』と書きます。大きくなるのは『良い』こと、すなわち『美しい』とは、『良い』ことと考えることができます。」と話をしました。

講話のあと、4グループに分かれての分科会が行われ、学校の立場、親の立場から意見が交わされました。各分科会で出された意見の一部を紹介します。

部会1 美しく話そう	▽目を見て話すことが大切である。 ▽言葉を受け取る側の気持ちを考えて話すことが大切である。
部会2 きれいな学校	▽自分の席の周りだけはきれいにしても、教室全体をきれいにしようという意識が薄いと感じる。掃除を通して心を育てたい。 ▽子ども部屋が散らかっているのを見ると、待ちきれずについ親が手を出してしまう。子どもが自分で掃除するまで我慢して主体性を育てたい。
部会3 気持ちのいい子ども	▽主体性をもって行動できるようになるために自分に自信を持たせたい。 ▽夢を持たせたい。▽「気持ちのいい」印象を与えるためには、服装、あいさつ、コミュニケーションなども大事な要素である
部会4 頼もしい先生	▽常に自分を振り返りながら、何にでも前向きに取り組んでいく姿勢を持つことが大切である。 ▽教えることに謙虚になる。 ▽子どもの声を聞く。

六車推進員は最後に、「先生方の教育に対する姿勢や、先生方の生き様が子どもや親に伝わってきます。自分の仕事に自信をもって取り組んでください。」とまとめました。

活発に協議する姿から、先生方やPTAの皆さんの人づくりへの熱い思いが感じられました。



グループごとにテーマを分けて協議。
付箋をもちいて、共通した意見などをまとめました。



グループごと協議内容を発表。



六車推進員によるまとめ。

人づくりちょっといい話

子どもを誉めるタイミング

私たちが教育を語るときに、その基本としてよく指摘されるのは、子どもの「つ」がつく年齢に物事を全部教えるということ（「つ」がつく年齢とは一つから九つですね。十歳になると駄目なんです。）「つ」がつく年齢に第1期の人格形成が行われるためですね。江戸時代もそうでした。この時代には三つで躰、五つで読み書き、七つでそろばんと言ったんですね。昔の人は偉いもんですね。

その「つ」のつく年齢で、一番子どもと接している時間が長いのは、やっぱりお母さんですよ。お母さんが育児を担当される場面がどのご家庭でも多いのですが、私がドキッとする言葉があるんですね。「育児は育自である」という言葉です。「自分を育てながら子どもを育てなければ子どもは育たないよ」という意味合いです。実際に教育問題に取り組んでもう三年になりますが、ようやく分かってきました。なるほど、私自分が深く教育を勉強しなければ、教育論なんてやってはいけないということが、勉強をするほど分かってくる。「育てる人に育ってもらおう」ということが大切なんですね。面白いことに、お母さんが育っていくと、子どもをどういう風に育てたらいいかがお母さんなりに分かってくるんですね。例えば、長男を育てる場合と長女を育てる場合、あるいは長男を育てる場合と次男を育てる場合。同じじゃないことにお母さんが気が付く。それも育児なんです。

例えば「誉めて育てる」とよく言いますね。いろいろな書物を読んだり成功例を聞いたりしますと、みなさん張り切ります。「庭を掃きなさい」「ペットにえさをやりなさい」と命令して、子どもがちゃんとやると「よくできた、よくやったね」と誉めるでしょう？その誉めた言葉は、子どもにはそれほど影響はしないんだそうです。親が言わないのに子どもが実行したことを見て「偉かったね、よく気が付いたね、よくできたじゃない」と言われると、これが子どもの向上心に火を点けたことになるんですね。

課題を与えてそれが全部できたことに対して、誉めないよりは誉める方がいいに決まっていますが、ベタ誉めはしないほうがいい。課題を与えないのに子どもが自ら課題を発見して、そして自分の力で自ら成し遂げた時の「よくやったね」という一言。これが子どもの心を開くというんですね。

ある新聞にこんな投書がありました。小学校五年生のダウン症の子に周りのクラスメイトがとても優しいんです。運動会があつて、かけっこをしたらビリなんですけど最後まで走った。そしたら翌日クラスメイトからメッセージが来た。内容は「運動会で止まらずに百メートルをよく走ったね、偉かったね」というメッセージなんです。このメッセージをその子はギュッと手の中に握って、涙を流したんだそうです。心が開かれた一時ですね。

草柳大蔵著 「午前8時のメッセージ99話」（平成13年発行）より



- 人づくりを県民運動に盛り上げていくため、県は人づくりに関わるさまざまな団体との連携を模索しています。「小さな親切」運動静岡県本部との連携はその一つです。
- 「小さな親切」運動は、「朝夕のあいさつをかならずしましょう」「人が困っているのを見たら、手伝ってあげましょう」などの8か条を掲げ、他人を思いやる気持ちを持ち、人のために何かをしようとして行動を起こす人が増えることを目指しています。県が掲げる「意味ある人」（何かができる人・精神的に自立している人・思いやりのある人）と目指す方向性が同じであることから、共同企画の検討や相互にホームページのリンク設定をするなどの連携を進めています。

由比町立由比中学校（「小さな親切」運動学校会員）の取組

「授業」「挨拶」「歌声」「ボランティア」「環境」の5つをスローガンに掲げている由比中学校では、以前からボランティア活動が盛んです。校内では給食後のお盆洗いやリサイクル活動など、校外では公民館、児童館、桜えび祭り、地区の体育大会、小さな親切運動主催の河川敷の清掃活動など、各方面からの募集に生徒が進んで参加するそうです。10月の青少年健全育成総決起大会では司会を買って出た生徒もいました。校長先生の話によれば、小学校の頃から地域で活躍する中学生の姿を見てきているので、ごく自然な形でボランティアを行う生徒が多いとのことでした。

平成19年10月29日には、夜7時から体育指導委員主催のニュースポーツ（ペタボード・ダーツ）講習会が行われ、SSC（スポーツ・サポーターズ・クラブ）7名の生徒が準備・受付・片付け等の作業とともに地域の大人たちとゲームを楽しみました。SSCは町教育委員会が募集したもので、50人近い生徒が登録し、年間約20日に及ぶスポーツ教室や各種大会にボランティアとして参加しています。

ある男子生徒は、「何かやってみたいと思ってSSCに入りました。ボランティアを通して同級生や先輩と一緒に楽しく活動できるだけでなく、町内の方と知り合いになれるし、地域のこともいろいろ知ることができ、毎日が楽しいです。これからも続けます。」と笑顔で力強く語ってくれました。提言で掲げる「気持ちのいい子ども」の姿を見た思いがしました。

由比中の生徒33人が県教育委員会認定の「県青少年初級指導員」の資格を持っています。「小さな親切」運動や県の人づくりが唱える、「何かができる人」が着実に育っています。



リサイクル活動も自ら応募して参加します。



一般の方とペタボードを楽しむSSCの生徒たち。準備や片付けだけでなく、地域の方とのふれあいを大事にします。



この生徒は、のべ数十回を超えるボランティア活動の実績があります。

「小さな親切」運動静岡県本部の活動は、「静岡県の人づくり」ホームページの「リンク集」からご覧いただけます。 <http://www.pref.shizuoka.jp/kenmin/km-240a/>

人づくりちょっといい話

「貰う」ことより「あげる」ことが大事

この間、イタリアのラベッコというところへ言ったんですよ。南イタリーの静かな山村なんです。部屋が十六室しかないホテルに泊まっていましたが、そこでも花火大会をやるんです。よくよく考えてみたら、人を楽しませる要素がなければ、私たちの生活というものは成り立たないんですね。

その点で、すごい話だなと思ったことがあります。金沢に大乘寺という禅宗のお寺がありまして、昔、月舟禅師という大変に優れた禅の和尚さんと、祖暁という小僧さんがいらっしゃいました。月舟さんが「おいおい、お茶を入れておくれ」と言うと、「はい」と言って祖暁さんが持ってくる。そのお茶がおいしいんだそうです。とうとう「おまえがいれてくれるお茶は格別においしいけれど、何か工夫をしているのかね？」と祖暁さんに聞きました。すると祖暁さんは「はい、一味を入れております」と答えるんです。「ほお、その一味とは一体何を入れるのかね？」と聞くと、「『親切』という一味を入れております」と答えるんですよ。言うまでもなく、飲みやすい温度と濃さでお茶をいれるということなんでしょうね。

これは日本だけの感覚ではないんですよ。もしお読みでなかったら、ぜひ声を出して子どもさんたちに読んであげてほしいのは、何といても『星の王子様』（サン・テグジュベリ作、内藤濯訳、岩波書店、1962年）です。この本の中で、友達になったキツネが、王子さまに「あんたが、あんたのバラの花をととてもたいせつに思っているのはね、そのバラの花のために、ひまつぶしたからだよ」「人間っていうものは、このたいせつなことを忘れてるんだよ。だけど、あんたは、このことを忘れちゃいけない。めんどろみたあいてには、いつまでも責任があるんだ。まもらなきゃならないんだよ、バラの花との約束をね・・・」というんですよ。

結局、ここでサン・テグジュベリは何を伝えようとしたかといいますと、「友だちになる、仲間になるということは、お互いにこの世の中のかげがえのない人というものを自分がつくらなければいけないんだ。相手に尽くすことがかけがえのない人になるんだ」というわけですね。

自分に何かをくれる人、自分のためにいいことを言ってくれる人がかけがえのない人なのではなくて、自分が何かをあげたり、自分が何かの忠告を与えたり、「こういう本を読んだ？」と言って教えてあげたり、「この音楽聴いた？」と言ってCDを貸してあげたり、そういう人がかけがえのない友達になるんですよ。

ところが、今は逆でしょう？何でも「欲しい」なんですよ。本当は、「貰う」のではなく、「あげる」ということの方が、人生の色合いとしては深いのではないのでしょうか。

草柳大蔵著 「続・午前8時のメッセージ99話」（平成14年発行）より



- 県教育委員会は、「地域の青少年は地域で育てる」をキャッチフレーズに、大人が子どもたちに温かい声を掛ける「地域の青少年声掛け運動」を展開しています。
- 大人から進んで、あいさつや褒めたり認めたりする一言を掛けることは、「**あなた達の良いところ、頑張っているところをちゃんと見ているよ**」というメッセージであり、子どもの自己肯定感を育みます。人間的なつながりができれば、時には注意をしても子どもは受け入れ、子どもの行動や振る舞いを地域ぐるみで良くしていくことができます。「人づくり百年の計委員会」提言の「社会と人間」の項でも、このような声掛けの効用が述べられています。

吉田町「笑顔いっぱい運動」(吉田町立自彊じきょう小学校区の様子)

吉田町では、平成 16 年秋から「笑顔いっぱい運動」と称した声掛け運動を実践しています。運動に賛同する町民の皆さんが、子どもたちの登下校の時間帯に、町教育委員会社会教育課から受け取った黄色いベストを着用して声掛けをしています。この 3 年間に町が配布したベストは 800 枚近くになり、地域に根付いた活動になっています。

町北部の自彊じきょう小学校区では、毎日朝 7 時頃から通学路の交差点に立つ人、犬と散歩しながら声を掛ける人など、黄色のベスト姿の皆さんが活動しています。「おはよう！いってらっしゃい！」とあいさつするだけでなく、看板に日替わりでメッセージを掲げる方、子どもとハイタッチする方、信号の待ち時間に子どもと遊ぶ方など、様々な関わりをしています。毎日参加している方は、子どもたちの小さな変化を見逃さず、「今日はグループの人数が少ないね。」「今日は元気がないようだね。」などと声を掛けていました。大きな声で運動員にあいさつする子どもを何人も見ましたが、大人に声を掛けられるうちに、子どもの方からあいさつしてくれるようになるそうです。

ある児童の話では、家を出て学校に着くまでに、6 人のベスト姿の方に会うということでした。多くの大人に見守られている子どもは、自分は大切にされていると感じるとともに、他者を受け入れていくようになります。大人による声掛けが、「意味ある人」の 3 条件のひとつである「思いやりのある人」を育てていくことを「笑顔いっぱい運動」は示しています。



交通安全指導をしながら子どもに声を掛けるWさん



毎日看板にメッセージを掲げて声を掛けるHさん



町社会教育課の職員も出勤前に声掛けに参加しています

「地域の青少年声掛け運動」に関する情報は、県教育委員会青少年課のホームページで御覧いただけます。

<http://www.pref.shizuoka.jp/kyouiku/kk-09/>

人づくりちょっといい話

声掛けの効用

今の家庭の中で一番聞かれるのは、お母さんが何かを言う、お父さんが何かを言う。うるせえなあ、それだけなんですね。(中略)

「どうしたの？今の子」と言うけれど、それよりもその子たちの「心の土壌」がどうしてそういうふう勝手に出来てしまったのだろうか。そのことの方が問題だろうと思うのです。

就職試験でも、茶髪でピアスなんかしている男の子がいると、まあ、サッカー選手なら入れるけれど、そうでない場合は、どこの会社の面接でも、お前、その髪、何とかしろとか、耳輪はずせよ、アフリカじゃあるまいしとか、そう言われます。

ところが橋本久義さんという通産省の役人がいましてね。非常に面白い人です。 casting課長になった時に、彼は役所と交渉して、「毎週木曜日だけ、一日自由にさせてください」と言って、彼は役所の車を使わないで、自分の車で、まず東京都内の金型を作っているところ、 castingをやっているところ、そういう工場を回って歩くのです。もう二千工場くらい全国を回って歩いた男です。

それでわかったことは、町工場に行くと、茶髪やピアスはざらにいる。それで彼らに「お前、どうして3Kと言われている、こんな暗い、汚い、臭いところで働いているんだ」と聞くと、「あの、先輩がいるからね」と言うのだそうです。

先輩がどうしたんだという、前に一緒にオートバイぶっ飛ばしたり、ディスコで踊ったり、その遊び仲間だった先輩が町工場で働くようになった。それで顔を見せなくなったため、3ヵ月くらいして「また一緒に遊ぼうよ」と工場を訪ねると、先輩は黙々と働いていた。茶髪で、もう耳輪ははずしちゃって。

「先輩、変わったんですね」

「うん、変わったか。俺、変わったかもしれない」

「どうして先輩、変わったんですか」

「ここの親父さんがいいんだよな。朝、『おはよう』と向こうから声をかけてくれるんだ。それで『何かわからないこと、あるかい』って教えてくれるんだよな。お前な、声かけられてな、教えてくれるとな、ちょっと人間、動けなくなるぞ。で、俺、こうなっちゃったんだよ。でも、俺、ようやく人間が生きるって、どういうことかわかったよ」

「それじゃ先輩、俺も入れてください」という次第で、その町工場には、ずっと茶髪の系列が出来ちゃったのです。

つまり、あいつは茶髪だ、耳輪だということ、もうそれだけで自己完結的な存在のように、われわれは誤解してしまうのですが、実は彼らを変えさせる情報を、何も送っていなかったということ。

それが先輩の「親父さんが声をかけてくれるんだよ」の一言で、後輩の心まで動いたのです。

声をかけてくれるということが、いかに大切なことかです。挨拶という言葉、「挨拶」というのは、心を開くという意味です。下の「拶」の語源は相手に迫るという意味。だから、「おはよう」「ご飯食べたか」「元気か」とか、そういう挨拶は心を開いて、相手に迫る。つまり、お互いに変わる情報をそこから交換し合うということです。

静岡県「人づくりの道標 草柳大蔵先生のメッセージ」より



- 人づくり推進員は、公民館・青少年健全育成会・地域の行政機関・NPO法人・地域の各種団体を対象とした「人づくり地域懇談会」を開催し、地域で人づくりにかかわる方々と幅広い意見交換を行っています。これらの機関・団体を対象とした懇談会の開催回数は、平成12年度から19年度までの8年間で、延べ628回に及びます。
- 「静岡県では、どこの町もどこの村も、しょっちゅう“人づくり”の話をしているよ」という噂が広がること(注1)が、「人づくり百年の計委員会」の願いです。

(注1)人づくり百年の計委員会提言「Ⅲ むすびの言葉」の文章より

浜松市北区民生委員・児童委員研修会

平成19年8月29日、浜松市北区細江町の田園空間博物館で「浜松市北区民生委員・児童委員研修会」が行われました。講師は人づくり推進員の内山秀三さん、参加者は45人です。

内山推進員は、人づくり提言の説明の際、草柳大蔵氏(人づくり百年の計委員会会長)の言葉を引用し、人間の持つ「福分」(注2)を認め合い、評価しあうことが「意味ある人」づくりにつながると述べました。

(注2)福分 各人がそれぞれ天からもらった持ち味(参考 草柳大蔵『日本人への遺言』海竜社 平成15年)

次に、「世界は1つの生命からはじまった」という絵本(村上和雄著、きこ書房)を紹介しました。お父さんとお母さんから生まれる子どもの染色体の組み合わせのパターンは70兆通りもあり、その中から「あなた」が生まれてきたことが奇跡であるという話を紹介し、自然の偉大な力がもたらした「生命」に感謝して生きることが幸せへの道だと述べました。

最後に、日本には挨拶の言葉がたくさんあり、それぞれに意味があることを丁寧に説明しました。例えば、「いただきます」には、「私^{いのち}が人間として正しい道、真実の道を歩むために、あなたの命をいただきます。そしてあなたの尊い命を私の命の中に生かします。」という誓いの挨拶であり、「さようなら」は「お別れしたくないけれど、左様のようなわけならお別れしなければなりません。」という別れを惜む挨拶です。互いに敬い合い、助け合い、感謝し合い、信じ合い、悲しみ合い、喜び合い、いたわりあう心が言葉に込められていることを理解して挨拶をすることが「美しい挨拶」につながると訴えました。

参加者の一人、鈴木智子さんは、次のような感想を述べていました。「民生委員は地域における人づくりを担う一員であるというお話や『意味ある人』をつくるという具体的提言は、日ごろの民生委員活動を通して出合う事例に照らして考える良い機会になりました。今回のように地域の活動に関わる者が県の提言の具体的な内容について研修する機会を得たことは、大変に意義深いと感じました。『厳しく躰をする前に、子どもの現状を具体的に知る、そして親のあり方から考えてみる必要がある』という正木健雄氏(元人づくり百年の計委員会委員)の言葉には大賛成です。」



「人づくり」を語る内山推進員

また、新しく会長になられた大野孝道さんは、「人は一人いただけでは人間にならない。人が二人になって初めてお互いに『人間』となる。なぜなら、人と人が向かい合うとそこに間ができる。だから人の間、つまり人間は“じんかん”という方が分かりやすい。この間を『お互いが幸せになるための条件で埋め合うこと』が人間の使命である。」という福分と幸せの意義に関連した話が印象に残ったと語っています。

自分の存在や何気なく使っている言葉の意味を改めて考えてみることなど、日常生活の中に「意味ある人」や「美しい“しつけ”」を考える機会はたくさんあるのではないのでしょうか。

人づくりちょっといい話

子どものゴールを考える

^{わかばやしげた}若林繁太さんという大変な教育家がいらっしゃいました。高校の校長先生をお勤めになった方ですが、一九八五年に『教育よ、よみがえれ』（講談社）という本を出していらっしゃいます。その中に「子どもを非行にする十か条」というのがあるんです。この十か条を読むと、そのころから日本の教育は一斉に崩壊を始めたということが分かるんですね。読んでみます。（前掲書より抜粋）

- 一 子どもに学習を強いること。
- 二 夫婦喧嘩は派手にすること。
- 三 不平はたゆみなく主張すること。
- 四 子どもを徹底して大切にすること。
- 五 夫婦は教育理念を違えること。
- 六 子どもの要求は何でも聞き入れること。
- 七 子どもの人格を常に評価すること。
- 八 子どもは勝手に行動させること。
- 九 常に子どもを他人と比較すること。
- 十 流行に遅れない子どもにすること。

どうしてこの十か条にあてはまるようなことを、父親母親が言うようになったかという、やはり、子どもをどういう人間に育てるか、という子どものゴールを親が考えたことがないからなんですね。子どものゴールを考える。それが家庭教育の基本なのにな。

第一は職分です。手に技を持つこと。「何か世の中に役に立つことをしたい」という子どもがいたら、その夢を叶えてやればいいですよ。つまり、生きていくための技術なら何でもいいんです。問題は大学を出ることではないんですね。二番目は自己形成です。自己形成というのは、自分の意見を自分の言葉でハッキリと言えるような人間にすること。三番目は、他人に対する思いやりです。この職分と自己形成と他人に対する思いやり、この三つが家庭教育の基礎なんですね。

もっぱら学校教育の中で、進学体系の何番目に自分の子どもを当てはめるか、それがお父さんやお母さんの価値観だったのではないですか。ですから、大学に入ってしまうと、「もうゲームは終わった、競争は終わった」といって、急に子どもから無関心になっていく。子どもの方も「もう勉強しなくていいんだ。バンザイ！」というようなもので、ますます人格も能力も低下していく。こんなことを言われて怒っている親の多いことを祈ります。

草柳大蔵著 「続・午前8時のメッセージ 99話」（平成14年発行）より

発行日 平成20年 月 日

発行 静岡県 県民部



■問い合わせ先

静岡県県民部大学室（人づくりスタッフ）

〒420-8601 静岡市葵区追手町9番6号

電話 054-221-3304

FAX 054-221-2905

E-mail daigaku@pref.shizuoka.lg.jp

ホームページ <http://www.pref.shizuoka.jp/kenmin/km-240a/>

静岡県ホームページ(<http://www.pref.shizuoka.jp/>)から、

「教育・文化」→「生涯学習」→「静岡県の人づくり」の順にクリック